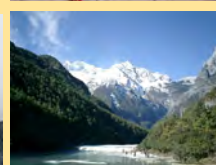
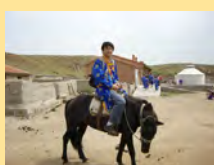
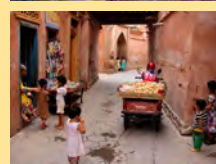
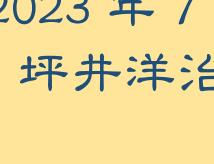
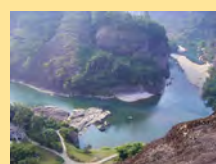
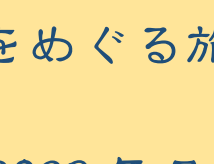
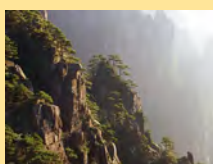
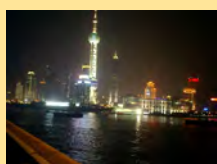


中国旅行記

中国边境と世界遺産
をめぐる旅

2023年7月
坪井洋治



まえがき

2003年から2006年までの4年間、仕事で中国の北京に駐在する機会を得た。その間、中国各地の顧客や社内拠点を頻繁に行き来したが、行く先々で、名所旧跡を見て回ったり、街をぶらぶら歩いて地元の人たちの暮らし振りを肌で感じたりするのがとても楽しみだった。

駐在して2年が経った頃、これまで訪れた都市や観光地を中国地図上にプロットしてみると予想以上に多かったことに驚いた。そこで、せっかくの機会なので、帰任までに何か目標を立てて中国の各地を旅してみようと思い、「中国の全ての省・直轄市・自治区・特別行政区 計34」を訪問することと、「中国の全ての世界遺産(当時33ヶ所※)を見て回る」との2つの目標を設定した。

それからは、機会を作っては中国各地を旅歩きした。当初はガイド付きの旅もあったが、慣れてくると手作りの旅を楽しんだ。週末に時間がとれると現地のホテルを予約し飛行機や夜行列車に飛び乗って出かけた。旅は一人旅・仲間との旅が半々くらい。複数人だと割り勘が効き経済的だが、一人旅の気儘さも魅力だ。旅先での移動は主にバスやタクシーだが、一人旅で移動手段の確保が難しい時には中国人向けのツアーに潜り込んだりもした。

そして帰任直前、ついに2つの目標の両方とも達成することができた。

これら旅歩き記録は個人ホームページに掲載していたが、本としてまとめたらとのアドバイスを受け、今回、再編集することとした。

なお、中国から帰任後にも、年1回程度、仲間と中国奥地の旅歩きを楽しんでいるが、その記録も追加している。

坪井 洋治

※中国の世界遺産は2006年当時33ヶ所、現在(2023年6月)は56ヶ所

目次

※題名下の丸付き数字⑩は、
P2の中国世界遺産番号⑩に対応

まえがき	1
目次	2
訪れた中国の世界遺産と主要都市	3
1 九寨溝・黄龍 ⑨⑩※	5
2 敦煌 ④	10
3 雲南省 ⑬⑭	13
4 ウルムチ・トルファン	19
5 桂林	25
6 ハルビン（哈尔滨）	27
7 黄山・宏村 ⑦⑭	31
8 張家界・鳳凰 ⑧	34
9 平遥・太原 ⑮	37
10 都江堰・青城山 ⑮	41
11 廬山・景德鎮 ⑮	42
12 峨眉山・楽山 ⑮⑯	45
13 承德・清東陵 ⑮⑯	47
14 泰山・曲阜 ⑮⑯	50
15 重慶・大足 ⑮⑯	53
16 洛陽・安陽・鄭州 ⑮⑯	55
17 大同・フフホト（呼和浩特） ⑮	58

18 武当山・武漢 ⑭	61
19 集安・瀋陽 ②⑯⑰	64
20 貴州省	68
21 チベット（西藏） ⑪	71
22 青海省	77
23 武夷山 ⑮	79
24 北京近郊 ①②⑤⑯⑰⑱	82
北京のお店紹介	84
25 上海・蘇州近郊 ⑮⑱	86
26 西安・銀川 ③	87
27 福建省・台湾	89
28 香港・広東・海南島	90
「番外編」駐在以降の中国旅行	91
A 華山	91
B 九寨溝・黄龍	92
C 楽山・峨眉山・青城山・都江堰	94
D カシユガル	96
E 鳳凰・張家界・上海	100
F 長春・西寧・チベット	103
あとがき	112



訪れた中国の世界遺産と主要都市



1. 九寨溝・黄龍 ㊟

2003年11月1日～3日

世界自然遺産（1992年登録）の九寨溝と黄龍に旅をする機会に恵まれた。九寨溝はアバ・チベット族（羌族）自治州に属し、成都の北西450kmにある秘境中の秘境で、中国で一番美しい所ともいわれている。これまでは成都からバスで12時間、3000m超級の峠を何回も越えてやっとたどり着く所で、車中で高山病になる人もいたそうだが、つい1カ月ほど前に航空路が開通したため、これを利用して出かけた。

「1日目」

午前中に成都での仕事を終え、15時半に、小型のエアバス（百数十人乗り）で成都空港を離陸。20分もしないうちに切り立った雪山が幾重にも見えてきた。シャッターチャンスと思ったが、カメラがスートケースの中だと気づきがっかり。

高い山の脇をかすめたと思つたらすぐに着陸。空港など作れそうにない海拔3347mの山岳地帯に「九寨黄龍空港」は奇跡的に存在していた。これより低い所だと周りの山が邪魔して着陸できないためにこんな所に造ったのかも知れない。



九寨溝黄龍空港

飛行機を下りるとさすがに息苦しい。気温は6度。カメラを取り出しパチパチ取りまくる。

空港からバスで1時間半かけ、九寨溝にあるホテル（海拔1990m）へ向かう。バスは凄いスピードでどんどん下る。途中、段々畑、山羊、ヤク、黒い小型の馬、原住民（少数民族）の家々の光景が目に見え込んだ。途中から道の脇に勢い良く流れる川が見え始め、だんだん大きくなっていった。ホテルまでもう少しの所で突然渋滞の列に突っ込む。この先で崖崩れが発生し緊急工事で全面通行止めとのこと。息抜きにバスを降りて近くを散歩。現地人と雑談を少し。カシオの小さいデジカメに興味を持ったようだ。中国では普通話（標準語）がどこでも通じることに改めて感激した。

結局1時間待たされて片側交互通行で開通し、やっとホテル「九寨溝国際大酒店」に到着。ホテルの店員は片言の日本語を話す人もいるが、日本人観光客は全く見られない。事実、今回の旅を通して、我々以外の日本人は全く見かけていない。ただ、中国国内の観光客は大勢つめかけており、そのうち、秘境ではなく、ありきたりの観光地になりそうだ。因みに、物価も観光地価格。足マッサージ（1時間）が、成都では25元（350円）だが、九寨溝では110元（1500円）。北京より高い。

夜は先ず成都でやり残した仕事を片付け、その後、仲間に

誘われカラオケへ。早々に引上げ部屋に戻って明日に備える。
「2日目」

9時出発。2000mの高地で少し冷えるが快晴・無風で絶好の九寨溝日和、ポロシヤツの上にダウンのジャケットのみで十分だ。1000元の入場券を見せて九寨溝のゲートを越え、専用の観光マイクロバスに乗り込んだ。乗る前に観光地図（4元）を購入。地図があると安心だ。

九寨溝は、大雑把に言えば、2つの支流と1つの本流が「Y」の字形になり、この中に、川、早瀬、滝、池、沼、湖などが連なっている。長さは全長60km、広さ740平方km、入口（「Y」の下の方）が海拔1990m、最高点が「Y」の左上の「長海」と呼ばれる所で海拔3150mである。

九寨溝の名前の由来は、溝（谷）に沿った9つのチベット族の村落（村寨）ということらしい。1970年代に森林伐採労働者により偶然に発見されたとのこと。急峻な谷が太古

の昔に氷河で埋め尽くされ、その氷河の流れが岩肌を削り刻んで、114の「海子」と呼ばれる湖沼と、17の瀑布を作りだしたそうだ。

石灰を含んだ水は、濁りがなく、水色・コバルトブルー・エメラルドグリーン等々さまざまな色に見える。またこれらのグラデーションが感動的だ。透明感もすばらしい。川の小魚（イワナに似ている）が群れているところもある。

バスは「長海」（Yの左上）を目指して猛スピードで駆け上がる。環境を考えて天然ガスで走る低公害車だそうだが馬力はある。道は殆どが未だ舗装されておらず、バスの席は怖いくらいに揺れる。途中、工事用のダンプが数多く走っており、工事中の箇所も多い。1時間強で最高点の「長海」に到着。

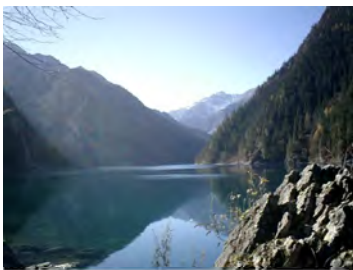
長海…透き通る水に青空が映って美しい。一般に中国の観光地の池や湖は濁っていることが多いが九寨溝は別格。北海道の摩周湖を思い出す。周りの山々を見ると、緑の針葉樹の中



九寨溝入口



長海



長海



長海

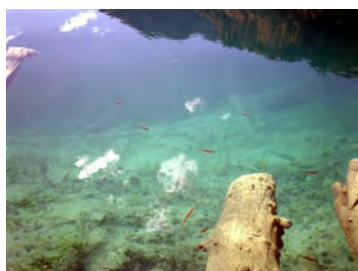
中に黄色く色づいた木々（カラマツらしい）が混じって美しいコントラストを作っている。その奥には岩を剥き出しにした5000



五彩池



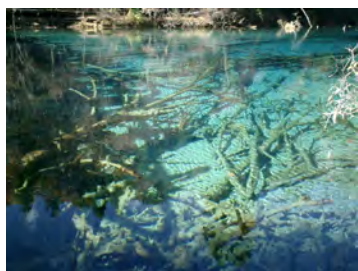
五彩池



熊猫海



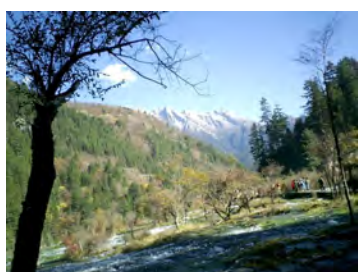
熊猫海



五花海



五花海



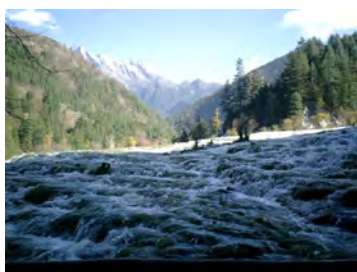
珍珠灘



珍珠灘



珍珠灘瀑布



珍珠灘

m超級の山々がそびえ立っていて、まるでアルプスの写真を見ているようだ。

五彩池…エメラルドグリーンとコバルトブルーで底まで鮮やかだ。遊歩道に沿って散策した。

再びバスに乗り、Y字の接点（2つの支流と本流の分岐点）の所まで下り今度は右側に登って行く。

熊猫海・熊猫海瀑布…バスを降り岸辺を散策。少し行くと

突然、瀑布が現れる。その大きさにびっくり（後でもっと大きな瀑布をたくさん見ることになるのだが）。

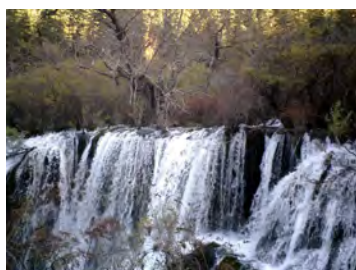
このあと、Y字の接点まで戻り昼食と買い物。九寨溝＋黄龙のVCD（2枚組10元）と、家族へのみやげ品を購入した。

昼食後、再度Y字の右上に戻り「五花海」へ。

五花海…湖沼の中の流木がとてもがきれいだ。水が冷たいため腐らないとのこと。水の色が微妙に変化する中を岩魚が



諸日朗瀑布



樹正瀑布



樹正瀑布



盆景海



水車で回るボン教のマニ車



チベット族の水車小屋

泳いでいる。下流側には瀑布もあり、九寨溝の中でも必見のスポットだ。
 珍珠灘・珍珠灘瀑布…流れの中に長い遊歩道がある。岩肌の浅瀬を跳ねる水は名前の由来の通り珍珠（真珠）のようだ。
 諾日朗瀑布…320mに及ぶ幅の広いきれいな滝。
 樹正瀑布…森の中のきれいな滝。滝の下流には川の中に木が生えている。

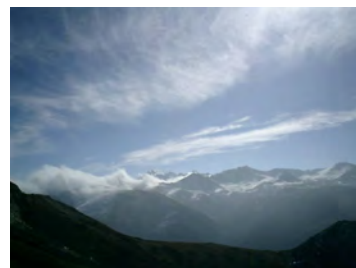
やがて橋が見えてきて、その袂には水車で回るボン教のマニ車がある。
 5時半頃ホテル帰着。今日はバスでの移動が中心だったが、途中ハイキングコースもかなりあって思ったより疲れた。

「3日目」
 朝6時半起床。雲がやや多いが天気は概ね良好。8時半にホテルを出発し、次の目的地の黄龍に向かう。黄龍は九寨溝

力的だ。
 夕食後、ホテルの別館でチベット民族芸能を見た。全体的にはチベット調であるが、現代的な衣装のチベット人のダンサーが現代調の歌や踊りを繰り出した。チベット族の女性はとても美しく魅力的だ。



標高 4200m地点から



標高 4200m地点から



チベット民族芸能

から130kmほど離れており、一旦空港まで戻りそれから黄龍への合計3時間の旅。途中、現地人の村をいくつも越えて行く。周りには5000m超級の山々が多く見える。

今回の旅行の最高点である海拔4200m地点の所でバスを降り撮影タイム。有名な雪宝頂山(5588m)も見えた。ゆっくり動いても息苦しい。この辺りまで来ると、森林はなくなり山は地肌剥き出しで高山植物が少しあるだけ。今日は高地でのハイキングが中心なので、念のため、途中で酸素ボンベを買った。1缶20元。20分ぐらい酸素が持つそうだからボンベと言っても海水浴で使う浮き輪かクッションのようなもの。

11時半に黄龍に到着し昼食タイム。高地で沸騰点が低いせいか芯があって固いご飯だ。早々に食事を切り上げ黄龍ハイキング開始。

黄龍は雪宝頂の麓にある水景群で、白や黄色の石灰岩で



黄龍入口



黄龍



黄龍



黄龍



黄龍

きたエメラルドグリーンの池が棚田状に3400mも連なる。海拔3100m〜3500mの高所にあるが、道は栈道で整備され、その両側に蓮の葉のような形の池が続いている。谷の奥には万年雪をいただく雪宝頂山が黄色い龍が山を駆け上るように見えるそうだが、今日は残念ながら見えなかった。黄龍は九寨溝と違って、入口(海拔3100m)から遊歩道はずっと歩いて登って行く。さすが3000mを超える高地、軽快には歩けずゆっくり一定のペースで登り始める。あまり速く登ってしまうと高山病になる恐れもある。自力で登れない人のために、客を駕籠に乗せ二人の男が背負って運んでくれるサービスあり。値段は高そうだが意外と繁盛していた。

上の方へ行くに連れ、所々に雪の積もっている所も見られたが、水は流れがあるせいか殆ど凍ってはいなかった。最後のほうはかなりきつく感じた。酸素ボンベを使う程で



黄龍



黄龍



駕籠サービス

チャに潰れており、気圧の違い実感した。

成都の四川料理店で最後の会食・宴会を派手にやってやっと解散。頭痛もすっかりとれ、気持ちよく疲れた身体で旅の余韻に浸りながらぐっすり寝た。

2. 敦煌 ④

2004年4月29日～5月1日

会社の同僚と2泊3日で「敦煌」を旅行した。

「1日目」

15時30分に北京空港を出発。飛行機は小型ジェット（BAe・146）で、途中「銀川」を経由しての4時間の旅である。

3時15分出発。空港に向けて同じ道を引き返す。酸素不足・疲れた身体・右に左に激しく揺れる車の3拍子が揃って気分が悪い。再度4200mの峠を越え1時間半で空港に。バスを降りると氷の粒（霰）がチラついていた。

飛行機に搭乗してやっと低気圧と酸素不足から解放された。因みに、酸素濃度は、海拔0mに比べ、3000mで約68%、4000mで約60%になるのだそうだ。気圧についてもほぼ同様の比率で低下する。成都のホテルへ帰って、九寨黄龍空港で飲みかけたペットボトルを取り出すと、グチャグ

20時過ぎに敦煌空港着。まだ明るい。敦煌は北京から1900km真西にあり、北京より1時間40分遅いことになる。敦煌は「沙州」とも呼ばれ、その名の通り広大な砂漠に囲まれたオアシス都市でシルクロードの交差点である。敦煌の年間降水量はたったの40ミリ、蒸発する水量はその2400倍。夏と冬、昼と夜の温度差も大きい。

空港から市内までは13kmと比較的近い。途中、ポプラ並木

が続く。所々に杏（アンズ）の木も見える。この辺りの畑では、以前は小麦が作られていたが今は全て綿花だそう。また、米がとれないため、麺が主食だそう。

入口の門をくぐって市街に入る。敦煌は人口18万人、この内9万人が農民の小さな街である。20分足らずで宿泊地の敦煌賓館に到着。四つ星。設備はイマイチだが格調の高いホテルである。チェックイン後、近くのレストランで遅い夕食をとった。

「2日目」

朝のレストラン会場は熟年の日本人だらけ、さすがシルクロードの主要地だ。比較的質素な料理が多い中で一番のお気に入りには蘭州牛肉麺。とても美味しかった。天気は薄曇り。気温は14〜26度で北京とほぼ同じ。絶好の観光日和だ。

8時に玉門關に向けて出発。玉門關は敦煌市内から西北へ100kmのゴビ砂漠のど真ん中にある。途中、狼煙台、映



漢代の万里の長城



漢代の万里の長城



玉門關



莫高窟



莫高窟

画村、墓（土葬だそう）が見えた。砂漠の細い道は入る。「駱駝草」が所々に生えている。こここの砂漠は「ゴビ砂漠」と呼ばれているが、実は、ゴビ（小石の意味）と砂漠（砂の意味）は別で、場所も別れており、この2つの間には河あるそう。

まず先に「漢代の万里の長城」に到着。北京近郊の「八達嶺」とは全く規模が違うが、2000年の風雪に耐えた姿で横たわっていた。

この後「玉門關」へ。玉門關は古代の関所跡で、漢代はここが国家の権力が及ぶ西端の場所であった。今は、25m四方・高さ10mの城壁が残るのみである。近くに、砂漠の中に水が溜まっている所（湿地？）もあった。

市内へ戻り昼食をとった後、世界遺産の「莫高窟」へ。莫高窟は千仏洞とも呼ばれその名の通り1000以上の洞窟があるが、発掘されているのは500弱だけ。それでも総面

積4.5万平米に及ぶ壁画と、2000体を越える塑像がある。最も古いものは4世紀で、その後1000年にわたり掘り継がれた。「本当に素晴らしい」の一言。中でも、次の3つが印象に残った。

158窟（涅槃窟）「臥仏」…特に左側（頭の方）から見るお釈迦様の顔が美しい。

第130窟「大仏」…高さ26mと巨大で立派。洞窟の中に入って見上げてびっくり。

第57窟の「樹下説法図」…「脇侍菩薩」の美しさには目を見張る。

洞窟内は撮影禁止だったので、少し高かったが豪華な写真解説本を購入した。

次は、「鳴沙山」。入口から駱駝に乗って山のふもとへ。駱駝は初体験。乗り降りの際に、前膝をガクンと折り曲げるが、この時に結構揺れて怖いのがその後は中々楽しんだ。ふもとま



鳴沙山(駱駝)



鳴沙山(月牙泉)



鳴沙山(登山途中)



鳴沙山(沙樹)



鳴沙山

で来ると、近くに「月牙泉」が見える。砂の中から湧き出た三日月形の湖だ。月牙泉の畔にある樓閣に登ってまわりを見てみる。鳴沙山は月の砂漠を進むキャラバン隊のイメージに近い風景を体験できる場所と言われるだけあって本当に素晴らしい。特に、風が作り出した鋭角な砂丘にできる日向と日陰のコントラストは幻想的だ。砂を良く見てみると、赤・黄・緑・白・黒の5色があり、天候や太陽の角度によって様々な色合いになるようだ。

砂山の頂上まで歩いて登ってみる。登り易いように階段みたいなのが付いている所（有料）もあったが敢えて何も無い砂の斜面に挑戦。細かい砂が足にまとわりついて、中々前に進めない。靴の中も服も砂だらけになった。最後はかなり苦しかったが休み休みして何とか頂上に到達。気分は爽快、眺めも最高だ。日が沈むまで待つ夕焼けの風景を見たかったが、時間の関係で諦めた。下山は滑り台を滑り降りるよう

に一気に駆け降りた。

夕食後は、みんなで爆竹を鳴らしてはしゃいだ。

「3日目」

同じ型の飛行機で帰路につく。

実質一日の観光であったが、盛り沢山で楽しい旅行だった。



鳴沙山

3. 雲南省 ①②③

2004年7月29日～8月3日

夏休みを利用して妻と二人で雲南省を旅行することにした。ちょうど仕事で日本に帰国していたので、北京への戻り時期に合わせて、成田→北京→昆明というルートで雲南省入りした。

「1日目」

JALからCA（中国国際航空）へと乗り継いで19時過ぎに昆明に到着。一日がかりの移動でやや疲れたが気持ちはワクワク。空港でガイドの岳さんと待ち合わせして、「雲秀楼」で夕食。有名な雲南料理「過橋米線」が出てきた。スープが冷めないように油を加えた米粉製の麺（「米線」と呼ばれている）で、昔、妻が対岸にいる科挙勉強中の夫に熱々の麺を食

べさせようとしたのが由来だそう。今日は機内食だけだと思っけしつかり食べてしまったのでお腹が苦しい。21時過ぎに昆明緑州大酒店にチェックイン。

「2日目」

朝、ホテル周辺を散歩。ちょうど良い気候で気持ちがよい。昆明は南に位置するが標高1900mと高地のため年間を通して穏やかで「春城」と呼ばれている。

「石林」に向かう車内で、岳さんから雲南省についての説明をもらった。雲南省は、土地の94%が山地。北西にある梅里雪山（標高6740m、未登頂の山）から南東のベトナム国境付近（標高76m）まで傾斜した形状の省で、様々な気候・自然が見られる。山岳地形のため省内の移動は大変で、今は航空機がよく利用される。このため昆明空港は中国で第3番目に発着数の多い空港だそう。東南アジア諸国とも近く交流も多い。鉄道も中国で一般的な標準軌（1.5m）の他に、昆明とハノイを結ぶ狭軌（1.0m）や鉱物運搬用の特殊狭軌（0.6m）と3種類もあるそう。また、雲南省は、動物・植物・非鉄金属（金・銀・銅・錫など）が豊富でと少数民族も25種と多い。また、煙草の産地としても有名で、昔は麻薬の産地でもあったそう。この他、松茸の也有名で、年間5000トンも採れるとのこと。

9時40分、石林着。石林は、昆明の南東100kmにあり、



昆明_石林



昆明_石林



昆明_西山龍門



昆明_石林

森林とカルスト地形による壮大な景観が400平方kmも続く景勝地。昔、海が隆起しその後の浸食や地震で岩山が削られ、鋭い石山の奇観が数多く出現したとのこと。桂林も同じようにしてできたが、石林の方が若いとのこと。

午後、今度は西郊外にある西山森林公園へ向かう。途中からリフトに乗り換えて山頂の「龍門」へ。地上から1000mもある龍門の断崖（標高2300m）からの昆明湖の眺めは素晴らしい。

龍門から帰りに突然の豪雨に遭い

しばらく休んでみると、近くに器用に「花文字」を書くおじさんがいた。どうやら名前を書いてもらっているらしい。とても綺麗で珍

しいので、自分たち二人の他、友達の分まで書いてもらった。

雨が小降りになったので、カートに乗って下山。途中「華亭寺」の中の美術品を扱っている店に立ち寄った際に、「棚田」を描いた一枚の美しい版画を見つけた。棚田に月光が当たって美しく輝いているもので枚数限定。迷ったが、実際に棚田を見てからという気持ちから買うのを見送った。

帰り道で雲南民族資料館のお茶屋に立ち寄る。雲南省はお茶の原産地でもある。プーアル茶の他に、高原烏龍茶、ライチ紅茶（「東方美人」の名がついている）等が有名。いろいろ試飲してみても、お土産に幾つか買った。

夕食後、空路で西双版纳（シーサンパンナ）に移動。空港でガイドの陳さんと待ち合わせ、宿泊先の泰園酒店へ。ホテルで1時間程、足マッサージをしてから就寝。

「3日目」

朝、ホテルの池の周りを散歩。ここは亜熱帯。植物の種類も昆明とは全く違う。

「カンランパ自由市場」へ向け出発。街を出てすぐにメコン川の橋を渡り川に沿って進む。今は雨期で、メコン川は茶褐色の色をして水量も多い。これがベトナムまで続いているのかと思うと感動する。

9時過ぎにカンランパ自由市場に到着。野菜・果物・肉・生きたアヒルや鶏・小物等々何でも売っていてすごい活気だ。「大仏寺」見学後、泰族の民宅を訪問。高床式の家で実際に泰族の人が暮らしている。

11時、「孟輪植物園」に向け、メコン川に沿って南東へ更に1時間進む。道はあまり良くない。途中帰りも含め何回かスコールに遭った。お蔭であまり暑くない。孟輪植物園の広



カンランパ自由市場



カンランパ自由市場



西双版纳_大仏寺



カンランパ自由市場



西双版纳_孟輪植物園



西双版纳_メコン川



麗江_玉泉公園



麗江_玉泉公園

全てヨルダン応援、というより反日本。妻も中国での反日感情を目の当たりにして戸惑った様子。

麗江空港でガイドの周さんと待ち合わせて、ホテル（阿丹閣酒店）へ。これまで1泊での移動が続いたが、ここ麗江では2泊。やっと少し落ち着く。

い園内では多様な熱帯植物が見られる。他の植物を絞め殺してしまう「ガジュマル」、音に反応する植物など様々だ。

帰り道、運転手が道端でパイナップルを買ってくれた。完熟でとても甘くて美味しかった。

夜に空路で麗江へ。飛行機が1時間遅れたお蔭で、西双版纳の空港で、アジアカップサッカーを見ることができた。日本がヨルダンに劇的な勝ち方をしたあの試合。周りは



麗江_束河村



麗江_東巴博物館



麗江_束河村



麗江_束河村



麗江_束河村



玉龍雪山



玉龍雪山



麗江古城



麗江古城



麗江古城

〔4日目〕

麗江は標高2400m。朝は少し肌寒いので長袖＋ブルゾンで出発。まず「玉泉公園」へ。「黒龍潭」とも呼ばれている公園で、湧き水が豊富。園内から玉龍雪山が見えるとのことだが、今日は残念ながら雲の中だった。園内にある「東巴（トンバ）博物館」へ。ここでは、麗江の人口の55%を占める納西（ナシ）族の象形文字である東巴文字やその文化を展示し

ている。東巴先生（東巴文化の伝承者）に記念に東巴文字で「家内安全」と名前を書いてもらい一緒に記念撮影。

9時に「束河村」着。ここは納西族の住居が村毎保存されている。通りの脇には堀があり玉龍雪山からの冷たい綺麗な水が溢れている。時々雨が落ちてくる。麗江は雨の多い所で、一日のうちに晴れたり雨が降ったりが何度も繰り返される。それがまた古い町並みに似合い、いつまで居ても飽きない。

昼食後、「玉龍雪山」へ。当初の計画では、リフトで途中までとなっていたが、是非にとお願いして、ロープウェイで一番高い所に挑戦することにした。標高4700m近い所なので、防寒着をレンタル、酸素ボンベ持参で出発。因みに、高山病を回避するには、十分な睡眠と水分を多くとることだそう。ロープウェイは、霧(雲)の中をどんどん登って行く。曇って下が見えないので高所恐怖症の私には好都合。4500m地点でロープウェイを降り、残りは歩いての登山。苦しかったが酸素ボンベの助けを借りながらゆっくり登り、ついに最高点の4680mに到達。北半球で最も南にある氷河が間近に良く見えた。因みに、玉龍雪山自体は雪崩が多く、未だ誰も制覇していない未登頂の山だとのこと。一方、納西族にとっては神聖な山であるため、登山挑戦者が出る度に、東巴先生が「失敗」を願って祈りをあげるとのこと。下山後は軽い高山病か、若干気持ちが悪い。



麗江古城



麗江古城



麗江古城



麗江古城



納西族古典音楽

このあと、獅子山にある「万古楼」に登り、「麗江古城」の町並みを見渡す。流石、世界文化遺産⑰になっているだけあって素晴らしい眺めだ。

獅子山から、四方街の方に向かってゆっくり歩いて降りて行く。街は観光地化して人で溢れているがちよっと残念だったが、それでも、とても綺麗な町並み風景が至る所に見られる。街中にはお店・レストランも沢山ある。散策中にある店でトンバ文字の印鑑を作って貰った。ガイドの周さんによると、納西族は商売が全く下手で、このため、漢族に店を貸して営業して貰っているとのこと。

夜は納西族の古典音楽を観賞した。

〔5日目〕

今日は「大理」方面へ。ホテルから車で何回か山を越え2時間ほどで「蝴蝶泉」に到着。ここでガイドの戴さんと合流。蝴蝶泉を散策後、喜州の白(ペー)族の村で、「三道茶」を飲



大理_蝴蝶泉



大理_喜州白族村



大理_喜州白族村



大理_三塔寺



大理_三塔寺

みながら白族の民族舞踊を鑑賞。三道茶とは、苦いお茶、甘いお茶、こもこも混ざったお茶を3回に分けて味わう。

この後、「三塔寺」を見て「大理古城」へ。三塔寺は、70 mの大塔とその両側にある40 mの二基の小塔が印象的なお寺だ。

大理は麗江に比べれば規模ははるかに小さく観光客も少ない。観光に力を入れていないとのこと。

夕方、空路にて昆明へ。夕食（キノコ料理）の後、岳さんの案内で、足マッサージへ。値段はやや高めだが腕は合格。
〔6日目〕

午前中に「民族博物館」を見学し、昼食後に空港へ。CA便にて北京に戻った。

今回の旅はスケジュール的にはやや厳しかったが十分満足できた。雲南省には、この他にも魅力的な所が沢山ある。

〔2004年11月撮影〕



玉龍雪山(ホテルから)



玉龍雪山(白水から)

例えば、壮観な棚田の風景で有名な雲南省南部の「元陽」や、菜の花がきれいな「羅平」（昆明から車で1日の所）、西北部の桃源郷「香格里拉（シャングリラ）」等々。次の機会に是非行ってみたい。

〔付記〕 2004年11月に会社の同僚と麗江・大理を再訪問した。このときは晴天で玉龍雪山が綺麗に見えた。

4. ウルムチ・トルファン

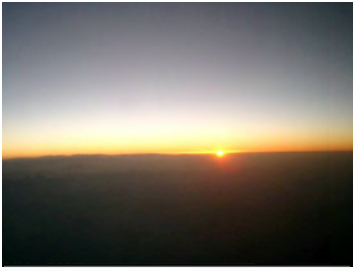
2004年10月1日〜5日

国慶節休暇を利用し、シルクロード(ウルムチ・トルファンの)の一人旅に出かけた。

「1日目」

北京は秋晴れで気温は15度だが、風が強いため厚手の上着が必要だ。北京空港内はいつもと同じの混み具合だが、旅行者ばかりでビジネス客はいない。先月から中国国際航空(CA)のエグゼクティブラウンジが使えるようになり、待ち時間をゆつたりと過ごせて嬉しい。

ほぼ定刻に離陸。機体(B767・200)は新しい設備で座席の背もたれも高く座高の高い私にはありがたい。天気が良いのと飛行機が通常より低空(8500m)を飛行しているため、眼下の景色がよく見える。しばらくして内モンゴルに入ると砂漠が現れどこまでも続く。太陽を追いかける様に西に進んで行ったが、19時24分、



飛行機内からの日没

ついに日没。とても綺麗だ。だんだん暗くなる中、地平線だけがオレンジ色に輝いている。

21時少し前にウルムチ空港到着。ウルムチは北京から約2400km西にあり、北京・東京間より遠い。

新疆ウイグル自治区の中心で、世界で最も内陸に位置する都市だそう。北京と同じ時間を使っているが実質2時間の時差がある。空港でガイドと待ち合わせホテル(新疆大酒店)へ。ホテルロビーで上海在住の日本人グループ(20人)に会う。雲南の時と比べ日本人が非常に多い感じ。年配の人が大半だが家族連れも多い。

「2日目」

朝10時(北京の8時の感覚)に天池に向け出発。ガイドの代麗さん(女性・23才)は2年間の日本語学校を卒業し今年4月から旅行会社勤めしているとのこと。ただ、オフシーズンは仕事が無くなるため別の仕事を探し来年また復帰予定で、今年は私が最後の仕事とのこと。日本語はイマイチだが真面目で明るい。もつと日本語を勉強して将来は上海辺りで働きたいとのこと。

天池まで1時間半、道は整備されていて立派だ。車窓からは広大な荒れ地に放牧されている牛・馬・羊が見える。高速を降りた後は天山山脈からの清流に沿って登って行く。途中「パオ」が所々に見える。パオは丸い形をしたカザフスタン人の住居で、全て観光用とのこと。料金を過ぎると道は更に険しくなった。日陰には雪が残っている。途中で専用バス、更に電気自動車に乗り換えて進む。

急に視界が開け天池に到着。快晴で遠くまでよく見える。



天池



天池

青い湖の
奥に、雪を
被った天
山ボゴタ
峰(544

と残念。ここは海拔1980mだが天気が良いせいいか寒くは感じない。遊覧船(20元)に乗り湖を一周した。

昼食後、ウルムチ市内へ戻り本場の新疆絨毯の製造現場とお店を見学。以前に西安で見たのより規模も大きく立派なものが多いが見るだけで早々に引き上げた。

15時30分、次の目的地のトルファンへ向かう。途中、道沿いに風力発電の設備が数kmにわたり連なっている所があり小休止。車を降りるとすごい風、さすが風力発電の場所だ。車は逆風を受けながら更に進む。平坦な不毛の土地がしばらく続いたが、その後、山々が見えてきた。山といってもそんなに高くはなく、石・砂利・土でできた裸の山だ。



風力発電設備

途中で道を間違える。今日の運転手(李さん)は余り慣れていない上に地図を見るのが不得意で、結局、私が地図を見て指示することに。地図と耳を頼りにやっとたどり着く。後で確認すると約40km・30分のロス、よくこれで済んだものだ。

トルファンは中国で最も暑い所で夏は最高気温が40度を超える。49度になったこともあるそうだ。一方、冬は零下30にもなる厳しい気候だ。広大なトルファン盆地の中にあり、標高は数十mと内陸としてはかなり低地。年間降水量は17ミリ。乾燥しているため果物は甘くて美味しい。特に葡萄は有名で、黄緑色の種無し葡萄が多い。雨は少ないが水には困らない。天山山脈からの大量の雪解け水が地下水となってやってくるためだ。

トルファンに着くと、明日の予定を繰り上げ、カレーズ(坎儿井)を見に行く。カレーズは天山山脈の伏流水をオアシスに引く地下水路で、万里の長城、大運河と並ぶ中国の古代三大土木工事のひとつだ。カレーズの近くの店で干し葡萄を味見してみた。みんな美味しいが、中でも「極品香」というのが飛び抜けて香りが良く美味しいので500g買った(50



ぶどう棚

元)。他のより数倍高かった。

中国一人旅でつまらないのは一人での食事。三人分位の量が出てきて結局残すことになるし、間が持たずに さつさと食べて終わりにしてしまう。そこで今回は、ガイドの代さんと運転手の李さんに無理に頼んで、一緒に食べることにした。規則では一緒に不可らしいが、一緒にのほうが話も弾んで食事も美味しい。

夜、町中を散歩してみた。出店・屋台がいっぱいで賑やかだ。道にはロバ車が多い。観光用と実用の両方がある。また、家の入口や道沿いなど至る所にトルファンのシンボルの葡萄の棚がある。ホテル（吐魯番賓館）の前は大通り自体が大きな葡萄棚で覆われている。

トルファンは人口49万人で、70%がウイグル族。イスラム教徒なので回族と同じかと思ったら違うとのこと。回族は男の帽子の色が白色、ウイグル族はカラフルな色だ。また、回族の姓は「馬」が非常に多く、他には「代」など。但し、ガイドの代さんは漢族だそうだ。

「3日目」

9時、高昌故城に向け出発。トルファンはかなり暑い所だが、今日は涼しく上着が必要だ。いきなり道に迷う。なんと高昌故城は行ったことがないと。道路地図もないため、3回ほど道をたずねやっと



高昌故城



高昌故城



高昌故城

到着。途中、道沿いに煙突から火が出ているのが見えた。トルファンから哈密まで油田地帯があるとのこと。

高昌故城は西遊記で有名な三蔵法師が厚いもてなしを受け、お礼に1ヶ月間ここで仏教の講義をしたことでも有名な所。ロバ車（往復50元）に揺られて奥まで進む。土埃がすごく、靴とズボンが真っ白になった。帰りのロバ車を待っていると突然声をかけられた。振り返ると、知人のSさん（北京駐在）だった。家族と一緒にツアー旅行に来ていて、今晚、敦煌に向かうとのこと。

次のアスターナ古墳では、夫婦のミイラがあったが特別面白いもの無かった。ガイドによると、ここに来るのは日本人ばかり。確かに周りを見ると日本人だらけ。

次は、火焰山の山並みを抜けてベゼクリク千仏洞へ。壁画の保存状況や規模は敦煌の莫高窟には及ばないが、ここから見える周りの景色は素晴らしい。千仏洞と火焰山の間を縫う

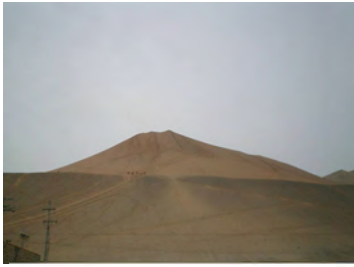
ように川が大きな音を立てて流れており、その付近一帯が緑のオアシスになっている。千仏洞の近くの火焰山の斜面を登っている人を見かけたので、途中まで行ってみることにした。敦煌の砂丘（鳴沙山）を登るよりは楽だが、それでも赤い砂利土が砂のように絡み付く。ラクダに乗って山を登っている人もいる。あんな急な所をよく登れると感心。振り返ると赤茶けた火焰山の山並みが壮大だ。この辺りは普段はかなり暑くなる様だが、今日は薄曇りでちょうど良い陽気。斜面の中間点まで登ったところで時間切れ、引き返す。

ホテルに戻る途中、「火焰山旅游風景区」という所に立ち寄る。ここからの火焰山が最もきれいとのこと、火焰山バックに記念写真。ところで、火焰山といえば三蔵法師が馬を繋いだ杭や猪八戒に似た岩が有名だが、今回は時間の関係で行けずに残念だった。

昼食後は、トルファン地区博物館を見学予定だったが、日



洞千仏クリクゼベ



火焰山



火焰山



火焰山

本人以外はあまり行かないと聞いて中止し、代わりに「アイディン湖（艾丁湖）」に行くことにした。海拔マイナス154mで中東の死海に次いで世界で2番目に低い所で、今回の予定には無かったが是非とも行ってみたいと思っていた。アイディン湖は市内から60kmの所にあるが、普通の車では行けない。500円でやっと行ける車を見つけた。但し、途中の吐峪溝という所まで回族（イスラム人）の二人組との相乗りが条件。14時40分、私とガイド、白い帽子の回族二人組、運転手の5人で出発。しかし、アイディン湖は南にあるのに東へ東へと向かう。問い正すと、吐峪溝はかなり東の所にあるとのこと、1時間近くロスするが止むを得ない。運転手は、アイディン湖より吐峪溝の方が綺麗で素晴らしいと盛んに勧める。確かに着いて見てみると大きなパノラマ的な景観だが、人工的な感じで好みではなかった。

15時20分、回族2人を降ろして再出発。30分位進むとす

ごい悪路になり、車が壊れそうなくらい激しく揺れる。運転もかなり荒っぽい。これでは車高が高いアウトドア用でないと無理だ。しばらく行くと、所々に塩水が殆ど干上がった小さ



艾丁湖（アイディン湖）



艾丁湖（アイディン湖）

な池（とい
うより水
溜まり）が
点々と見
えてきた。
また、土を
掘り返し
た跡も至

る所にある。塩を採っているとのこと。一時間位進むと行き止まり、道を間違えた様だが、運転手は何とかここで済まそうとしている。怯まずに引き返して別の道を探させる。結局、3回間違えてあきらめ模様になった所で、17時25分、ついに「艾丁湖」の石碑を発見。湖は干上がって見るべくもないが、やっと世界第二の低地にたどり着いて感激。それにしても、道の途中に案内板が全くない。それだけ誰も行かない所なのか。石碑の所で、ウルムチから車と自転車で来た四人組に出会った。道中は誰にも会わなかったことを考えると奇跡的だ。記念に塩の固まりを拾い、写真を撮り、たった5分の滞在で帰路につく。また一時間は悪路が続く。

途中、運転手が盛んに空腹を訴える。彼は回族で昼間飯を食っていないという。断食しているのかと聞いたら、今日は忙しくて食べる時間が無いとのこと。確かに、ラマダン（断

食月）は未だだねと大笑い。19時10分、ホテル着。運転手に感謝。疲れたが達成感のある冒険だった。

夕食後、ウイグル族の歌舞を見る。ウイグル族の女性は彫りが深く美しい。最後は観客も加わって一緒に踊って盛り上がった。夜はホテルで按摩。100元／時間とかなり高め。按摩士は西安の女性で、地元のウイグル族の按摩士はいないようだ。

「4日目」

朝、予定になかったが、トルファンのシンボル「蘇公塔」へ。高さ44mの塔には登れないが、横のモスクの上に登って一面の葡萄畑が見渡せた。

10時にウルムチに向けて出発。また3時間の旅。途中、達板城（ダーバンチャン）という小さな町を通る。ちょうど、中国語の本に「達板城の姑娘（お姉さん）」という歌があったので覚えている。ガイドによると昔は歌のように美人が多かったが近親結婚が多いせいで最近は美人でなくなったとか。列車と並行しながら更に行くと「塩湖」が見えてきた。死海並みの塩分濃度だそうだ。近くに塩の工場（観光用）も見え



ウイグル族の歌舞

る。

13時、ウルムチ到着。昼食後、お土産屋へ。日本語が話せる店だというが、私はどうせ行くなら地元向けの店に行きたかった。しかし、彼女の立場も考え、ちよつと見てみることにした。案の定、観光客向けで値段も高めだ。でも、地元の弦楽器（四胡の一種）が妙に気に入って値段交渉。半分に値切った所で手を打った。

次に、新疆ウイグル自治区博物館へ。新館は工事中（来年完成）のため展示物は非常に少ない。楼蘭の美女のミイラを身近にみた。眉毛や髪の毛一本一本までちゃんとしていたのには驚いた。白人そう。その他に10体のミイラがリアルに展示（少々不気味）してあったが、それ以外は目ぼしいものは無かった。その後、市内を一望できる紅山（934m）に登る。ウルムチは今や高層ビルが林立する大都市となっている。山頂にアヘン戦争で有名な清末の政治家「林則徐」（福建

省出身）の像があった。

夕食後は街を散策。ガイドの代さんには危険なのであまり遠くまで行くなと言われたが、1時間以上かけてウイグル族の屋台の多い解放南路の先まで歩いてみた。ウルムチは人口の8割は漢族だそうだが、この辺りは8割が回族かウイグル族だ。活気がありお祭りのような賑わいだが、確かに深夜一人で歩くのは怖いかも知れない。夜はまた按摩（足と全身の2時間で160元）。旅行に来て按摩をしながら地元の人と話すのは楽しみの一つだ。ところで、新疆には少数民族の言葉は色々あるが、普通語は十分通じる（なまった感じはあるが）。

「5日目」

最終日はホテルで11時までのんびり過ごして空港へ。チェックイン時に頼み込んで「前方右窓側」の席を何とか確保。来る時に見逃した天山山脈をどうしても見たかったからだ。



ウルムチ_紅山



ウルムチ市内



ウイグル族の市場



ウイグル族の市場



天山山脈（機内から）

運良く空は快晴で、離陸して直ぐに万年雪を抱いた天山山脈の大パノラマが見えてきた。手前の赤茶けた大地から天山山脈に続く大地のうねりが何とも雄大だ。しばらくすると山脈が次第に低くなり赤茶けた大地から砂漠へと風景が移っていく。北京近くまで来た時、「空からの万里の長城」を初めて見ることで感激した。

今回の旅行は、好天に恵まれ、また思いがけず「艾丁湖」にも行けて満足だ。また、時間的にも余裕があり疲れずにのんびりと旅行ができた。ただ、ウルムチで「第一号氷河」に行けなかったのは残念だった（7・8月以外は雪が深く観光禁止だそうだ）。



天山山脈（機内から）



万里の長城（機内から）

5. 桂林

2004年10月23日

会社のイベントで桂林に出席した際に、桂林一日観光の機会があり、漓江下りと两江四湖巡りを体験した。

8時40分 漓江下り出発点「磨盤山」に到着。船着場にはざつと50隻以上の観光船が並んでいる。どれも50人以上は乗れる大型船で山水画に出てくる舟とは大違いだ。



漓江下り開始



漓江下りの船



漓江下り風景



漓江下り風景

9時10分 漓江下り開始。観光船が等間隔に船隊を組んで一斉に下り始める。午前中は下り、午後は空船を戻すという段取りだ。今年は渇水で例年より水量が少なく浅い所は



漓江下り風景



漓江下り風景



水牛



竹の筏



漓江下り風景



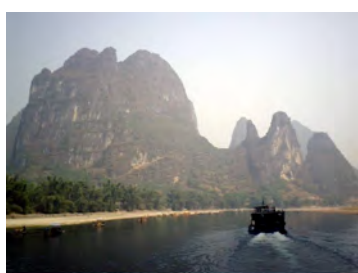
漓江下り風景



九馬画山



九馬画山



漓江下り風景



漓江下り風景

0.5 m〜1 m位しかないため、座礁しないように慎重に進んで行く。途中で何度か船底を擦った。

30分程経った頃から観光写真で見えるような風景が現れこれが延々と続く。今日は少し霞んでいて写真の様に鮮やかな色ではないが、逆に水墨画のようで趣がある。この夏に昆明の「石林」を見たが、石林の岩が壮年期とすれば、こちらはやや老年期、岩は角がとれて全体に丸みを帯びている。近く

の山から遠くの山へ少しずつ色が淡くなっていく。そのシルエットの重なり合いが何とも絶妙だ。

途中、竹の筏を上手に操る地元の鵜飼の漁師、岸辺で水草を食べる水牛の群れ等、のどかな風景が続く。ただ、河岸工事が進み、岸辺にモダンな別荘が見える等、観光化が確実に進んでいるようだ。

とにかく広くて長い。風光明媚な山並みが現れては過ぎて



两江四湖夜景



两江四湖夜景



漓江下り終点

行く。途中、船上での昼食、昼寝：長過ぎてちよつと飽きてきた。浅瀬を越えるのに時間を要したせいか、約1時間遅れの14時40分に終点の陽朔に到着。バスでホテルに引き返した。

夜は「两江四湖」を巡る船遊びを体験。两江四湖とは、桂林の街を流れる2つの川（漓江と桃花江）と四つの人工湖（榕湖・杉湖・桂湖・木龍湖）を船でまわる1時間半の旅で最近できたものだそうだ。船から見える夜の街並みは緑・黄・赤の光でライトアップされ幻想的だ。少し人工的過ぎる感はあるが一見の価値あり。湖は河よりも水位が3.5m、4m高いため、3ヶ所の水門がある。今回はそのうちの2カ所を通過。水門で水位を変える設備として、一般的な水槽式のもの他に、設備全体が上下するエレベーター式のものがあり興味深かった。



兆麟公園 氷祭り



兆麟公園 氷祭り



兆麟公園 氷祭り

春節休暇を利用して極寒のハルビン旅行をした。

〔1日目〕

旧暦の除夕（大晦日）18時にハルビン空港着。小雪。空港から直接「兆麟公園」の氷祭りへ。気温はマイナス20度以下、寒いというより痛い。10分位が限界でそれ以上は耐え難い。先日買った一眼レフで撮影開始。低温でもバッテリーも含め順調に稼働している。

ホテル（昆侖大酒店）にチェックイン後、遅い夕食をとることにした（機内食がなかったのでお腹が空いた）。店を探すが何処も閉店、大晦日のせい。結局ケンタッキーでガイドの耿（コウ）さんと一緒に軽く食べた。

夜の12時に年越しの水餃子（中国版の年越しそば）を無料で食べられると聞いて、早速1Fロビーに降りていつていた

6. ハルピン…哈尔滨

2005年2月8日～10日

だった。ハルピンは水餃子の本場だけあって美味しい。大盛りの皿いっぱいを平らげた。

「2日目」

今日は春節（旧暦1月1日）。ホテルは旅行客で満杯。殆どが南方系の人達で、中でも台湾人が多い。ガイドの耿さんの旅行社でも客の95%以上は台湾人とのこと。その他、香港、シンガポール、マレーシアからの人もいるが、不思議なこと

に日本人は三日間を通して全く見かけなかった。夏は結構いるそうだが、今の季節は年配の人には敬遠されるようだ。朝9時半出発。一時間半かけて二龍山スキー場へ。前々から中国でスキーをしたい思い日本からスキーウェアを持参してきていて、これまで北京の人工スキー場には何回か行っている。是非、ハルピンで滑りたいと思っていたが、やっと念願がかなった。雪質は最高だがコースは短く平坦。それな



ハルピン駅



二龍スキー場



二龍スキー場



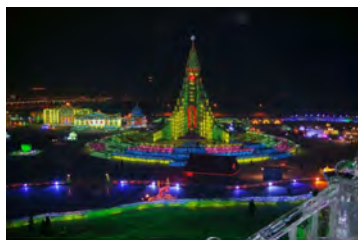
二龍スキー場



ハルピン市街



ハルピン郊外



冰雪大世界



冰雪大世界



ロシア料理店



冰雪大世界

りの急斜面はあるが物足りない。ただ10年振りの初滑りとしては最高だ。中国ではスキーはまだまだメジャーなレジャーでは無いようで、ほとんどが初心者。華麗に滑る人は見かけない。コースの途中に止まっている人も多く注

意が必要だ。

4時間は滑りたいと思っていたが、とても寒くて2時間が限界だった。特に山頂は風もありリフトに乗っている間に顔が凍ってしまう。でも久し振りにスキーを満喫でき満足。2時半に遅い昼食をとった後、途中、テレビ塔を見学してからホテルに戻り休息した。

夕方6時から昨日より大規模な氷祭り「冰雪大世界」見学。ハルピンの氷祭り「冰灯」は全国的に有名で規模も大きい。しかし、最高マイナス17度、最低マイナス25度という気候は厳しすぎる。1時間で身体はすっかり凍りついてしまった。

夕食は「波特曼西餐庁（ポートマンレストラン）」でロシア料理を食べた。ハルピンはロシアとの関係が深く、ロシア風の施設が目立つ。この辺は、通称「ロシア街」と呼ばれているそう。ロシア料理で一番有名なのは国営の「華梅西餐庁」という所だが味はこちらの方がはるかに上だそうで、しかも美しいロシア女性のピアノと弦楽器の生演奏付き。ボルシチや壺入りシチュー罐肉等々。ガイド、運転手と三人でしっかり食べて150元（2000円弱）は格安、満足だ。ガイドの耿静さんはハルピン出身の満州族。真面目で予定外のことまで快く対応してくれた。運転手の王さん（漢族）は北朝鮮通。ガイド等で北朝鮮に50回以上行っている

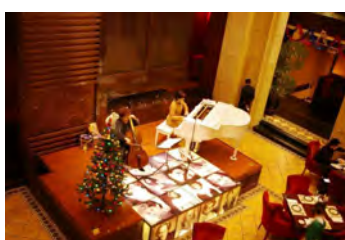
とのこと。北朝鮮人が国外に出るのは大変だが、日本人を含め外国人が北朝鮮に入るのは簡単とのこと。ハングル語とカタコトの日本語ができる。

「3日目」

予定には無かったが、朝、「侵華日軍731部隊罪証陳列館」へ。所謂、石井部隊の細菌兵器開発、人体実験の状況を表示。見学者は私一人だけ。中国ではどの地域でも日中戦争に関する



凍結した松花江



ロシア料理店



731陳列館



731陳列館



洪水の到達点マーク



人民防洪勝利記念塔



東北虎林



太陽島雪祭り



ロシア街の石畳



聖ソフィア教会



太陽島雪祭り



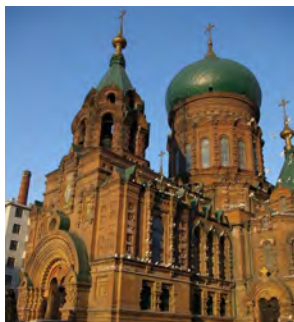
ロシア街の石畳

る展示館が必ずある。南京や北京の盧溝橋などが有名だ。中国政府の愛国主義教育（反日教育）の影響がとても強いようだ。

帰りに「松花江」の畔にある人民防洪勝利記念へ。松花江は全長1840km、中国で5番目に長い川で、北朝鮮国境に近い長白山の天池から流れ出て黒龍江（アムール川）に合流し日本



聖ソフィア教会



聖ソフィア教会

海に出る。松花江は冬には完全凍結しトラックでも走れる状態になる。氷祭りで使う氷はこの松花江の氷を切り出して使うそうだ。

松花江の河畔からロシア街を散策。石畳の道が何とも素晴らしい。この石畳の石は各々の長さ／深さが1.5mもあり、非常に丈夫な作りとなっているそうだ。

東北虎林（サファリパーク）を見物後、松花江の中州にある「太陽島」で今度は雪祭りを見物。午後2時で最も温かい時だがそれでもマイナス17度、早々に引き揚げた。水餃子店で昼食をとった後、ロシア正教の美しい教会「聖ソフィア教会（聖索菲亞教堂）」を見学した後、空港へ。

北京に着くと、気温0度だが温かく感じた。

7. 黄山・宏村 ⑦⑧

2005年11月25日～27日

安徽省出張の機会に、仕事仲間10名（うち日本人2名）と世界遺産の黄山と宏村を旅行した。

「1日目」

仕事の関係で、北京から西安・上海を経由し、前日深夜に安徽省（黄山）に入った。当日は午前中で会議が終わり、午後



宏村全景



宏村への途上



宏村風景



宏村入口



宏村_水に映える町並み



宏村_水に映える町並み



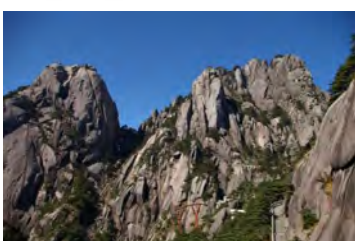
宏村風景



宏村風景



黄山_玉屏楼付近



黄山_玉屏楼付近

からはフリータイム。皆で宏村を観光。宏村は世界文化遺産に登録されている「安徽省古民居群」の中の一つ。未解放地区なので外国人は入境許可書の取得が必要だが、仲間の中国人に紛れて許可書無しで入ることができた。宏村は明・清時代の民家がほぼ完璧に保存されており、それが水と良く調和している。特に池の水に映った街の光景は素晴らしい。

「2日目」

世界複合遺産の黄山へ。バスで麓の慈光閣まで行き、ここから玉屏ロープウェイで標高1680mの玉屏楼まで一気に登る。少し肌寒いが快晴で周りの山々がくっきりと見える。登山客に手招きをしてい

る様な迎客松をバックに記念撮影。この後、黄山最高峰（標高1864m）の蓮花峰に登る組とスキップ組に分かれたが、もうひとりの日本人のNさんも無理やり誘って登る組へ。途中はとても険しく下を見ると目が眩みそうになる。やっこの思いで頂上へ。眺めは最高で遠くまでくつきり綺麗に見える。下山後、今度は絶壁に刻まれた石段「百歩雲梯」を息を切られながら一気に登り、光明頂（標高1840m）へ。遠くに「飛来石」は見えた。飛来石は空から飛んできて刺さった様な格好の12mもある奇石。どのようにして出来たか本当に不思議だ。



黄山_迎客松



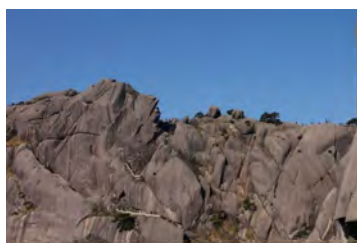
黄山_迎客松



蓮花峰(最高峰)山頂にて



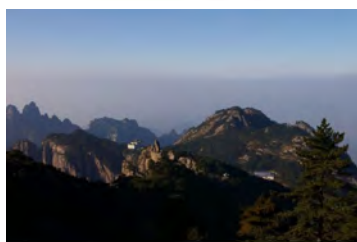
蓮花峰(最高峰)山頂から



黄山_光明頂への途上



黄山_光明頂への途上



黄山_飛来石を望む



黄山_光明頂から



黄山_百歩雲梯



黄山_排雲亭



黄山_飛来石



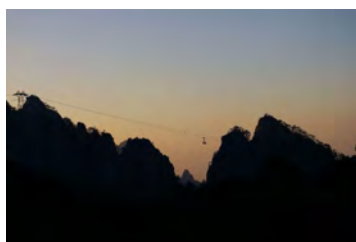
黄山_飛来石への途上

が湧いて来るのが有名で、夕日の名勝地でもある排雲亭へ。今日は雲一つ無い。一日中歩き続けて、夕方やっと北海賓館に到着。夕焼けに映るロープウェイが綺麗だ。

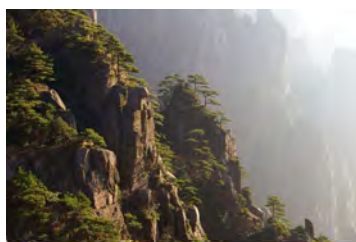
「3日目」

早起きしてご来光を見に清涼台へ登る。今日も快晴。山の端が次第に赤く染まりやがて太陽が顔を出す、その刻々と変化する様子は実に神秘的だ。朝食後、黒虎松から始信峰を見た後、下りの雲谷ロープウェイで雲谷寺へ、バスに乗り換え下山。途中、お茶屋さんで買物タイム。黄山毛峰という緑茶が有名で1セット購入した。

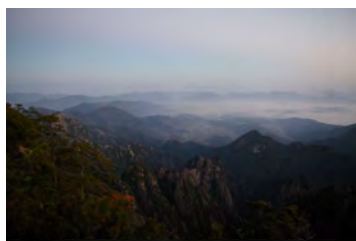
午後は有志3人でゴルフ。連日の登山の疲れで途中から足を引き吊りながらプレー。夕食後皆と別れ一人深夜便で北京へ戻った。無茶をしてバテバテになったがとても楽しい旅だった。



黄山_夕暮れ



黄山_排雲亭



黄山_早朝の清涼台



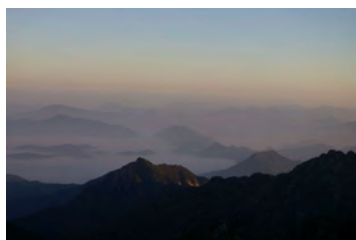
黄山_北海賓館



黄山_ご来光 in 清涼台



黄山_ご来光 in 清涼台



黄山_早朝の雲海



黄山_清涼台

＜スケジュール＞

11/24(木) 上海→黄山 MU5561 (21:15-22:10)

黄山高尔夫酒店泊

11/25(金) AM 仕事、PM 宏村観光 黄山高尔夫酒店泊

11/26(土) 終日 黄山観光 北海賓館

11/27(日) AM 黄山観光、PM ゴルフ

黄山→北京 CA1552 (21:25-23:35)

8. 張家界・鳳凰 ⑧

2006年5月18日～22日

仕事の関係で10名の仲間（うち日本人3名）と張家界を旅行した。張家界は1992年に「武陵源」の名前で世界自然遺産に登録されている。中国にある4つの自然遺産のうちのひとつで前からは非行ってみたいと思っていた所。やっと夢が叶った。



猛洞河川下り



猛洞河川下り



猛洞河川下り



猛洞河川下り



芙蓉鎮



猛洞河川下り

〔1日目〕

南京での仕事を終え夜行便で張家界へ。出迎えのガイドは地元の少数民族「土家族」の青年。分かり易い中国語だが私の実力では半分聞き取るのがやっと。マイクロバスに乗り15分でホテル着。とても蒸し暑い。昼間の最高気温は35度だったとのこと。

今回は前半が猛洞河川下りと鳳凰古城観光、後半が本命の張家界（武陵源）観光だ。

〔2日目〕

朝9時出発。狭くて乗り心地に悪いマイクロバスに揺られ2時間半で猛洞河に到着。ガイドが「全身ずぶ濡れになるから覚悟して」と言うので、急いで、雨具とサンダル、眼鏡止め一式を10円で買って準備したが、ガイドは殆ど意味がないと言う。筏風のゴムボートに乗って川下り（中国語で「漂流」と言う）を開始。最初は流れが緩やか。途中でお兄さんが舟で近づいてきて水鉄砲やらバケツを買えと勧める。何に使うのかと思って前を見たら、ボート同士で水の掛け合い合戦をやっている。激戦で皆ずぶ濡れ。我々の舟は参戦を回避しようとしたが、一緒に乗った女性3人組が仕掛けてしまったため一斉に戦闘状態に。水鉄砲売りのお兄さんの策略にまんまと嵌まる。



「姜糖」製造中



棚田風景



鳳凰古城の朝



鳳凰古城夜景



鳳凰古城のお店



鳳凰古城の街中



鳳凰古城の街並み



鳳凰古城の街並み



鳳凰古城_沱江



鳳凰古城_沱江

夕食後、
鳳凰古城
夜景を觀
光。古い
街並みと
城壁がラ
イトアッ

県や有名
な白酒
「酒鬼」
の工場脇
を通過、
3時間半
かけて鳳
凰に到着。

3時間超えの川下り、後半はみな戦闘に飽きたのと川が急流になったことで本来の川下りを楽しむ。上半身は水掛け戦争、下半身は川下りのしぶきで、結局、雨具の甲斐なく全身ずぶ濡れになってしまった。

2時過ぎに芙蓉鎮という所で昼食。この付近は大部分が少数民族で漢族は20%とのこと。土家族語で、女性は「アーメン」、男性は「アグ」と言うとガイドから聞いて、食事の時

に皆で係員を「アーメン、アーメン」と呼んでみた。食後、街をブラブラする。街中に「人民公社」の看板がある。中国に来て初めて見る。

次の目的地の鳳凰に向かう車窓には田園風景が広がる。この辺りは棚田が多い。今は田植えの季節。機械は無く、牛と人手で作業している。

途中、昔は殆どの住民が強盗だったと言う物騒な町…吉首

プされ、沱江に映る光景は絶品だ。沱江にある跳石を伝って対岸の酒場(酒吧)へ。皆で酒を酌み交わし夜景を楽しんだ。
 「3日目」

朝から鳳凰古城を観光。鳳凰は湖南省の西部に位置し明・清時代の古い街並みが残る古城。周囲を青い山々に囲まれ、町の真ん中を「沱江」が悠々と流れている。地元苗族の作家「瀋從文」の小説「辺城」の映画が80年代に大ヒットしたこ



鳳凰古城_沱江



鳳凰古城_沱江



鳳凰古城_沱江遊覧



鳳凰古城_沱江遊覧



鳳凰古城_沱江遊覧



鳳凰古城_沱江遊覧

ともあり中国人には有名な所らしいが、日本人は殆ど見掛けない。私も今回初めて知った。ただ、地球の歩き方の最新号(06〜07)に鳳凰の特集が載っているので今後は日本人が押し寄せるかもしれない。

石畳の路地の両側には商店が並び活気に溢れている。苗族の女性が手作りの土産物売っている。また「姜糖」と呼ばれる生姜飴を独特の延ばし方で作っている店も有る。何個か土産に買った(1個3元)。橋のたもとから小舟に乗って沱江をゆっくり遊覧。両岸には、半分位が川に突き出ているこの地方独特の木造の家が見え、畔では女性達が川で洗濯をしている。対岸からは若い女性の歌う民謡の音が聞こえてくる(これは観光用だそう)。次に「虹橋(沱江にかかる大きな石橋)」の上に建つ「風雨楼」へ。ここからの眺めは特に素晴らしい。鳳凰の紹介写真としてよく使われるとのこと。河沿いには堤防代わりの城壁が続き、これに並行して豪商の邸宅が並ぶ「老菜街」がある。この後、「東門城楼」「瀋從文故居」「楊家祠堂」「熊希齡故居」を見てまわり、昼食後、車で張家界へ戻る。

「4日目」

いよいよ張家界観光。天気は晴れでやや霞がかかっている。ロープウェイで



張家界入口



黄石寨ロープウェイ



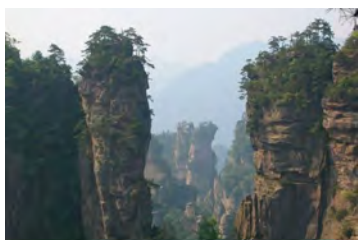
張家界_黄石寨



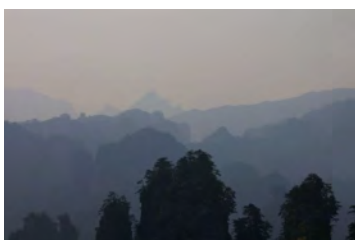
張家界_黄石寨



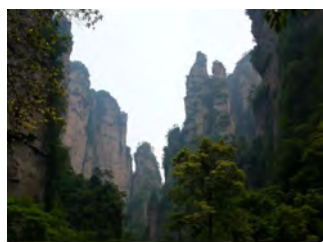
張家界_黄石寨



張家界_黄石寨



張家界_黄石寨



張家界_金鞭溪



張家界_金鞭溪



張家界_宝峰湖遊覧



張家界_水繞四門



苗族の女性と



張家界_十里画廊

「黄石寨」へ。最新式の設備で3つの黄色いゴンドラがセツトで一緒に動く。怖がる時間も無いくらい早く終点に到着。「黄石寨」は切り立った山の上かと思ったら案外平坦で誰でも歩ける。「六奇閣」「摘星台」と歩き、「琵琶溪」「五指峰」を見てまわる。黄山とも違う、桂林とも違う独特の奇景にただ圧倒される。言葉で説明するより写真を見てもらっ

た方が早い、実際は写真以上に凄い。午後は「金鞭溪」へ。溪谷に沿ったハイキングコースを「水繞四門」まで

「5日目」
絶好の天気
で霞も無い。
今日は「天子
山」方面へ。
先ず、観光電

車で「宝峰湖」へ行き、小舟で湖上を遊覧した。
この後、
水が多いこと
だ。
源が黄山と違
うのは、緑と
水が多いこと
だ。
途中、「金鞭岩」「紫草潭」「千里相会」を見て回る。武陵



張家界_十里画廊



張家界_十里画廊



張家界_賀龍公園から



張家界_賀龍公園から



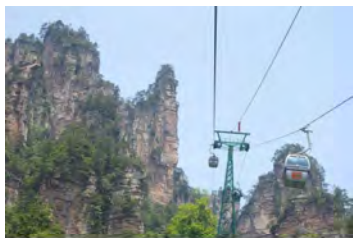
龍王洞



龍王洞



土家族の店員



下りロープウェイ

車に乗って「十里画廊」へ。ここから見る景色は圧巻でその名の通り一面画廊の様だ。一眼レフで写真を撮りまくる。この後、ロープウェイで「賀龍公園」へ登り、ここから、「御筆峰」「仙女献花」などを見る。下山後、時間が余ったので、有志で「龍王洞」を観光した。

最後の夕食は皆で盛り上がった。白酒も入り、店の「アーメン」（土家族の女性店員）と記念写真。

盛り上がっている最中、仕事の関係で、私は皆と別れひとり空港へ。深夜に北京に戻った。

＜スケジュール＞

5/18(木) 南京→張家界 MU2707 (20:40-22:00) [張家界泊] 民航旅游山庄

5/19(金) 猛洞河川下り。土家族の村: 芙蓉鎮で昼食&観光。専用車で鳳凰へ(3.5H)。

夕食後 鳳凰古城の夜景観光。[鳳凰泊] 曉園賓館

5/20(土) 鳳凰古城観光(沱江遊覧, 虹橋風雨楼, 東門城楼, 潘從文故居, 楊家祠堂, 熊希齡故居) 専用車で張家界へ。[張家界泊] 民航旅游山庄

5/21(日) 武陵源観光 「黄石寨」(摘星台六奇閣・琵琶溪・五指峰) 「金鞭溪」(金鞭岩・紫草潭・千里相会・水繞四門)、宝峰湖上遊覧 [張家界泊] 武陵源賓館

5/22(月) 張家界「武陵源」観光 「天子山」(賀龍公園・御筆峰・仙女献花・十里画廊) 「龍王洞」観光、買物、夕食後空港へ。張家界→北京 CA1384 (21:40-23:55)

9. 平遙・太原 ⑧

2006年6月24日～25日

急に旅に出たくなり、近くて手頃な世界遺産「平遙古城」へ行くことにした。平遙は明代から清代末期まで山西商人の拠点であり、特に清代末期は為替業務で栄えた中国の金融中心地であった。その後没落したが、再開発が行われなかったため、明代始めに造営された町がそのまま残っている。

今回は旅行社経由で全て手配したので楽な旅だった。

「1日目」

朝、北京から空路で太原へ。空港でガイドのWさんと待ち合わせ専用車で出発。最初は太原市内の「普祠」へ。普祠は周の武王の子の唐叔虞を祭った所だそう。滾々と湧き出る泉「難老泉」と樹齢三千年の傾いた柏の老木が印象的。Wさんの話では世界遺産に追加申請中とのこと。

この後、高速をとばして平遙へ。途中で警察のパトカー



太原_普祠



太原_普祠



平遙古城_西門



普祠の難老泉



平遙古城_日昇昌



平遙古城_市楼

に停められる。何かと思えば、我々の車の後部ナンバープレートが無い。今朝盗まれたとのこと。中国ではよくあるらしい。北京でもプレート無し新車は良く見掛けるが呆れた。10分位調べた後、お咎め無しで解放される。

「平遙古城」の城壁（西門）に到着。突然、人力車の叔父さんが声を掛ける。Wさんの友達で、彼にただで人力車に乗せて貰い城内へ。西大街から南大街に入るとシンボルの「市楼」が見えてきた。「県衙（ガ）を見た後、「成錦雲」という店で昼食。午後は、銀行（両替商）の元祖「日昇昌」を見学、その後、さっきの人力車の叔父さんの案内で、城内に住んで漆塗りの工芸品を作っている「侯さん一家」を訪問。中でお茶を飲みながらお喋りしたり太極拳の実演を見せて貰ったりした。帰りに、漆塗りの素敵な

に、漆塗りの素敵な

指輪ケース（280元）を妻のために購入した。この後、暑い中だったが、城壁に登り西門から東門まで半周した（1周は6.4km）。城壁は数年前の地震で少し崩れた所もあるそうだが保存状態は良好。途中、モンゴル様式の「奎星楼」に登り街の全景を見ることができた。

夕方、近くの「双林寺」と「鎮国寺」を観光した後、夕食の時間までホテルに戻り休憩していると、突然激しい雷雨が襲ってきた。とにかく凄い。豪雨の中を夕食の店に飛び込む。この辺は毎日の様に雷雨・嵐があるそうだ。

「2日目」

平遙から太原へ戻る途中で「喬家大院」を観光。清代に財をなした豪商の邸宅（313も部屋がある豪邸）を博物館にしたもの。映画の撮影舞台にもなったため観光客が多かった。その後、太原市内に戻り「双塔寺」観光。2つの八角形13層の塔が全く同じ形で鏡に映した様だ。

時間が余ったので「汾河」の河岸付近を散策。更に、按摩店で時間を潰して空港へ。19時のフライトで北京に戻った。



太極拳の実演



平遙古城_侯さん一家



平遙古城_漆塗り工芸家宅



太原_双塔寺



平遙古城_奎星楼



平遙古城_城壁の上から

〈スケジュール〉

6/24(土) 北京→太原 CA1145(7:20-8:25) 太原市内の「普祠」観光後平遙へ。

平遙で「平遙古城」「双林寺」「鎮国寺」観光 「麗澤苑国際酒店」泊

6/25(日) 平遙から太原への途中「喬家大院」観光。太原で「双塔寺」観光。

「汾河」河岸散策。足裏按摩で時間潰し。太原→北京 MU5295(19:00-20:05)

10. 都江堰・青城山 ②

2006年6月29日

成都出張中に仕事が早く終わったので、友人にタクシーを手配してもらい、世界遺産の「都江堰」と「青城山」を観光した。

午後2時にホテルを出発。途中、運転手がガス欠だと言ってLPGスタンドへ。長い列で30分もかかった。1時間半で

「都江堰」着。だが運転手は初めてらしく全く地理が分からない。仕方が無いので地図を買ってこちらが道を指示することに。

高台の「秦堰楼」まで車で行き、ここから岷江の水利施設の全貌を見渡す。岷江が上流で外江と内江に分流されそれぞれがゴウゴウと音を立てて流れている。水量も多い。中国は昔から土木技術が優れている。この都江堰は紀元前3世紀に

作られたものだが今でもその機能を果たしている。

高台から河辺に下りて、内江に架かった吊り橋を渡って中州（金剛堤）へ。急流に架かる吊り橋はちょっと怖い。金剛堤から人字堤まで電動車で進み、その後歩いて離堆公園を経で出口へ。南橋を見た後、こちらに廻しておいたタクシーに乗って、次の目的地の青城山へ向かう。

30分足らずで「青城山」入口に着く。「青城山」は道



都江堰



都江堰



都江堰(吊橋)



都江堰(吊橋)



都江堰



都江堰(吊橋)



都江堰離堆公園)(



都江堰



都江堰(南橋)



都江堰(南橋)



都江堰の碑



青城山(天師洞)



青城山



青城山(入口)

教と仏教の聖地で、道教寺院のある「前山」とある「後山」に分かれている。今回は時間の関係で「前山」のみ。「山門」から大急ぎで「月城湖」へ。しかし、対岸のロープウェイはギリギリの所で終わっていたので、こっちは諦め、途中迄引き返して

「天師洞」方面へ登り始める。すると、「担ぎ屋」が寄つてきて乗れとしつこく迫る。最初は拒否したが、時間も無いことだし一度は体験してみるかと思ひ直し乗ることにした。重い私を籠に乗せ二人で担ぐ。バックアップ要員が二人いて途中で交代しながら進む。あつと言う間に「天師洞」まで来てしまった。下りも勧められたが自分で降りた。結局、見たのは「青城山」全体の三分の一位か。待たせていたタクシーで成都に戻ると既に20時近くになっていた。

11. 廬山・景德鎮 ⑮

2006年7月7日～9日

駐在期間も残り少なくなり、中国の世界遺産を全部制覇したいという夢を達成すべく毎週末に旅行を計画する中、今回は同じ夢を持つ同僚のHさんと一緒に「廬山」を旅行した。この話を福州在住のSさんに話すと是非行きたいということで、三人旅となった。

廬山は昔から避暑地として知られ、多くの文人・著名人が訪れている。日本の箱根・軽井沢といった所か。また、共産党の「廬山会議」が開かれた場所でもあるが、この会議後、国が纏まらなかったこともあり、「陰」の山と言う人もいるとのこと（顧客で老朋友のDさんの話）。

「1日目」

夜9時半に南昌着。空港で運転手とSさんが待っていてくれた。Sさんは福州からの直行便が満席だったため廈門経由で先に来て我々に合わせてくれた。高速をとばして2時間弱で廬山の麓の「廬山天沐温泉賓館」に到着。温泉レジャー施設を兼ねた3星ホテルだが、我々の宿泊棟は合宿所の感じだった。もう24時近かったが、折角なので3人で水着を買って



廬山_含鄱口



廬山を麓から望む



廬山_天橋



廬山_天橋



廬山_如琴湖(人口湖)



廬山_仙人洞



廬山會議旧址



廬山_美廬別墅

温泉施設へ行ってみた。色々な施設があるがこんな深夜にいるのは我々だけ。30分位で引き上げた。

「2日目」

朝、ホテル前から廬山が一瞬だがくつきりと見えた。大雨の予報だったが何とか持ちそうか。8時過ぎに出発し1時間強で廬山着。予定には無かったが運転手の勧めで先ず「含鄱口」へ。日の出の絶景ポイントだそうだが一面の霧で何も見えない。次に「白居易草堂」がある花径公園を経由して、崖から石が飛び出ている「天橋」へ。怖かったが三人で乗って記念写真。この後、「錦繡谷」から「仙人洞」へ。霧で20m位しか見えずに残念だが、霧が山に押し寄せたり引いたりする光景は幻想的だ。昼食後、宋美齡（蒋介石夫人）の別荘である「美廬別墅」や「周恩来記念室」、「廬

山會議旧址」がくつきりと見えた。大雨の予報だったが何とか持ちそうか。8時過ぎに出発し1時間強で廬山着。予定には無かったが運転手の勧めで先ず「含鄱口」へ。日の出の絶景ポイントだそうだが一面の霧で何も見えない。次に「白居易草堂」がある花径公園を経由して、崖から石が飛び出ている「天橋」へ。怖かったが三人で乗って記念写真。この後、「錦繡谷」から「仙人洞」へ。霧で20m位しか見えずに残念だが、霧が山に押し寄せたり引いたりする光景は幻想的だ。昼食後、宋美齡（蒋介石夫人）の別荘である「美廬別墅」や「周恩来記念室」、「廬



景德鎮_陶磁器製の信号



景德鎮_博覧館



景德鎮_博覧館



鄱陽湖



鄱陽湖

山会議旧址」を観光。

夕方、車で2時間半かけて景德鎮へ移動。景德鎮合資賓館(3星)泊。夜は三人で足マッサージに行った。

〔3日目〕

朝から車で「陶磁館」、「佳洋現代工場」、「古窯博覧区」を見てまわる。景德鎮は陶磁器の生産でとても有名で、今でも中国最大の産地だそう。私は陶磁器の知識に乏しくただ見

て回るだけだったが、Sさんの博識で色々質問し、最後には素敵な

組合せ皿(小く大10枚程)を購入。Hさんもお母さんから頼まれたとこのことで綺麗な花瓶を買った。

昼食後南昌へ。運転手のDさんが

「もと来た高速道路では無く新しく開通した道があり距離も近いし景色も良い」と勧めてくれた。巨大な「鄱陽湖」の南側を大きな橋をいくつも渡りながら行くルートで景色が素晴らしい。今回の運転手のDさんは親切で気が利く。食事の場所探し、観光案内、追加観光の勧め(料金追加無し)等々、ガイド兼任の感じだ。空港でSさんと別れHさんと二人で北京へ戻る。Sさんはこの後

遅い便で厦門へ、そのま
ま車で福州へ戻り月曜朝
一に出社だそう。三人
で和気あいあい楽しい旅
だった。

〈スケジュール〉

7/7(金) 北京→南昌 CA1573(19:25-21:30) 車で廬山の麓へ。廬山天沐温泉賓館泊
7/8(土) 専用車で廬山へ(1.5H)、含鄱口・花径公園・錦繡谷・仙人洞・美廬別墅・廬山会議旧址観光 夕方、専用車で景德鎮へ(2.5H)。景德鎮合資賓館(3星)泊
7/9(日) 専用車で陶磁館・佳洋現代工場・古窯博覧区 観光。昼食後、専用車で南昌空港へ(3.5H) 南昌→北京 MU5175(17:50-19:55)

12. 峨眉山・楽山 ⑩⑪⑫

2006年7月14日～16日

Kさん、Hさんと3人で四川省の世界遺産を観光した。Kさん、Hさんは、一足先に成都入りし、「都江堰」と「青城山」を観光。私は前に行っていたのでスキップし、夜に成都入りし翌日から2人に合流することとした。

「2日目」

朝、当初の予定外だったが運転手に勧められて「パンダ繁育研究基地」へ。「四川省のパンダとその生息地」が世界遺産に登録されたばかりとあつて期待していたが、季節的に最悪で、パンダ様は全て檻の中で氷の板を敷布団に熟睡中。遊んでいるパンダもどこかにいるだろうと探し回ったがくたびれ損。記念写真を撮って早々に引き上げ、次の目的地の「楽山」に向かう。

「楽山」に到着し昼食後、船で川（岷江）に乗り出し水上



パンダ繁育基地



氷の上で昼寝中のパンダ



楽山大仏



楽山大仏



峨嵋山の麓



楽山大仏

から「楽山大仏」を見る。世界最大だそうで、さすがにデカイ。座っているのに70m以上あり、離れないとカメラに収まり切れない。この後、今度は山に登り山側から見物。目の前に横顔、鼻や耳だけでも6〜7mはありそうだ。大仏の脇の階段を降りて足元まで行けるとのことだが、長蛇の列で待ち時間が1時間以上とのことで断念した。

「3日目」

朝、かなり混雑すると聞いていたので早起き、6時発の

登山バスに乗る。

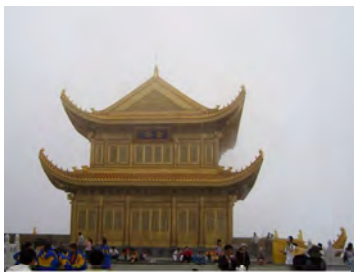
2時間以上登り続けてやっと終点の「雷洞平」着。ここから2分歩いてロープウェイに乗り換える。毎度のことだが、高所恐怖症で震えて



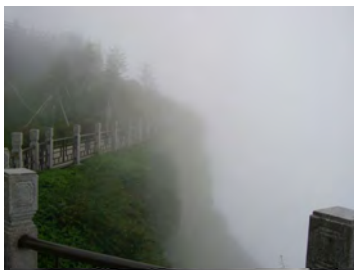
峨嵋山_上りロープウェイ



峨嵋山_金色の仏像



峨嵋山_金頂



峨嵋山_金頂付近の霧



霧の中の下りロープウェイ

いて隣のHさんに笑われた。更に15分程歩いてやっと頂上の「金頂」に到着。標高3077mというだけあって夏でも寒い。上着持参で正解。「蛾眉山」は「普陀山」「九華山」「五台山」と並んで四大仏教名山のひとつで、古くから仙境（仙人の住む所）と讃えられてきたそう。頂上付近に一際大きい金色の仏像があった。でも、いくら仏教の聖地とはいえ、自然と不釣り合いな仏像だと我々日本人は思うのだが・・、中国にはこんなものが多い。我々が「金頂」に着いたとたん、急に霧が立ち込めてきて下界の景色が全く見えなくなった。残念。ここは年に300日以上が雨が霧だそうなので止むを得ない。

「金頂」を一通り見終わって帰ろうとすると、更に先の「万沸頂（標高3099m）」への観光列車があるのに気付く。最近出来たらしい。聞いてみると待ち時間は1時間でも間に合わない。もう少し早く気付いていればと悔やみつつ下山

を開始。途中で「万年寺」に立ち寄る予定だったが、歩きのルートでないと行けないことがわかりこれも断念。

下山後に遅い昼食をとり成都空港に戻った。

＜スケジュール＞

7/14(金) 北京→成都 CA4116(21:30-23:30)

タクシーで森樺商務苑酒店泊へ

(K/Hさんは朝から成都入りし、都江堰・青城山観光)

7/15(土) パンダ繁育研究基地を観光後、樂山観光。

峨眉山大酒店泊

7/16(日) 終日、峨眉山観光後、成都空港へ。

13. 承德・清東陵 ⑫⑯

2006年7月22日〜23日

NさんKさんと三人での観光をすることになった。承德は昔「熱河」と呼ばれ、北京から北東へ230kmで、燕山山脈の中腹の武烈河の畔にある美しい街。清朝の夏の離宮である避暑山荘とその背後に配置された仏教伽藍の外八廟があり、ともに世界遺産に登録されている。

「1日目」

朝8時に自宅を専用車で出発。今回は、友達のRさん経由で専用車をチャーターした。ちよつと高め（全込2000元）だが、列車より便利なのと3人で割勘できるので決めた。北京・承德間は高速道路建設中で、現在開通しているのは北京側が六環路迄と承德近郊の数キロのみ。車は順義・懷柔・密雲と北京郊外の街を進み、古北口で長城を越え承德市へ入る。



避暑山莊



避暑山莊



避暑山莊



避暑山莊から外八廟を望む



避暑山莊から外八廟を望む



避暑山莊から外八廟を望む



避暑山莊



避暑山莊

11時半に承德着。昼食後、避暑山莊観光した。標高が高い（340m）だけあって北京程暑くない。入口でガイドを雇い半日かけて要所を見て回る。中国最大の宮廷庭園といわれるだけあって凄く広い（頤和園の2倍、故宮の8倍）。避暑山莊を取り囲む「万米の長城（万里の長城の千分の一のミニ版）」の高台からみる外八廟、特に、チベットのポタラ宮のミニ版である普陀宗乘之廟は見事。また、船上からの湖の景色も絶

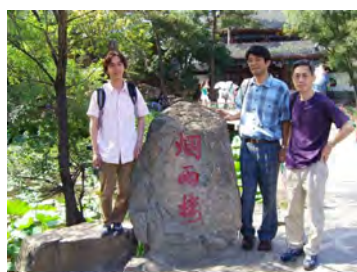
品。

翌日は朝8時から外八廟へ。外八廟はチベット仏教寺院の総称で実際には12の寺院はあるそう。今回はそのうちの代表的な3ヶ所…普陀宗乘之廟、須弥福寿之廟、普寧寺を見てまわる。何と言っても圧巻は普陀宗乘之廟、美しく規模も大きい。これでもポタラ宮のミニ版とは！ また普寧寺にある世界最大の木彫観音像「千手千眼大悲観世音菩薩」も凄い。

時間が余ったので、リフトに乗って磬鍾峰（スイケイホウ）へ。山頂に突き刺さった様な40 mもある巨石（俗称：洗濯棒）が一際目立って市内の何処からでも望めるので、昨日からずっと気になっていた。若干霞んでいたが山頂からは、避暑山荘と外八廟の全貌を見渡せる。
昼食後帰途につく。途中で事故渋滞に巻き込まれ散々。家に着いたのは夜の7時半過ぎになってしまった。中国では渋



避暑山莊



避暑山莊



普陀宗乘之廟



避暑山莊_遊覧船から



普陀宗乘之廟



普陀宗乘之廟



普陀宗乘之廟



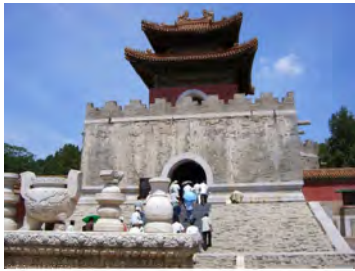
普陀宗乘之廟



普陀宗乘之廟



普陀宗乘之廟



乾隆帝の裕陵



香妃の陵墓



香妃の陵墓



清東陵参道



裕陵の地下宮殿



磬錘峰へ



磬錘峰

滞時に反対車線まで使って我先にと進むため、途中でデッドロック状態に陥る。今回もこれで全く動かなくなった。中国人の良くないところだ。

＜スケジュール＞

7/22(土) 8:00 出発 11:30 承德着

昼食後、避暑山荘観光 承德 露露大酒店泊

7/23(日) 8:00 外八廟、磬錘峰観光

13:30 承德発 19:30 頃 北京着

「清東陵」 2006年7月2日(日)

7月の休日を利用し、Nさんと二人で世界遺産の清東陵に行った。

自宅から2時間半で清東陵に到着。清東陵は、北京の東西に分かれている清の皇帝皇族の陵墓のうちの東の陵墓。河北省遵化市にあり、世界遺産に登録されている。ここにある4人の皇帝の陵墓のうち、今回は、康熙帝の景陵と乾隆帝の裕陵を見た。裕陵は中が公開されており地下宮殿を見ることができた。更に、乾隆帝の妃の陵墓の裕妃園寝、西太后の陵墓の慈禧陵、ウイグル族で乾隆帝の側室となった香妃の陵墓も見た。香妃墓は、新疆のカシュガルにもあるが、調査の結果ではこちらが本物とのこと。夕方、北京に戻って遅い昼食をとった。

14・泰山・曲阜 ⑥⑬

2006年7月28日〜30日

今回は初めて中国人向けのツアーに参加して、泰山・曲阜を1泊2日で旅した。

「1日目」

金曜夜に北京から空路で済南に入る。深夜にホテル着。「泰山・曲阜1泊2日ツアー」の支払を済ませ、早々に床に就く。

「2日目」

朝から生憎の雨、景色はあまり期待出来そうにない。駅前に集合し7時半出発。初めての中国人向けツアー参加なのでやや緊張。夏休みで家族連れが多く一人旅は私だけ。

10時に泰安（泰山の麓の街）に到着。その後、曲阜に向かい、世界文化遺産の「孔廟」「孔府」「孔林」を見学。孔廟は皇帝の住居だけに許されている紅い壁、黄色い瓦を使っておりさすが孔子



済南駅前



曲阜_孔廟



曲阜_孔廟



曲阜_孔廟



曲阜_孔廟



曲阜_孔廟



曲阜_世界遺産の碑



曲阜_孔林

様。曲阜に着いた頃から雨が上がり暑い夏の空になった。夕方、泰安に戻りホテルへ。ホテルは2つ星だが不満は無い。

「3日目」

天気は晴れ。集合時間の8時半にロビーに行くと誰一人いない。心配でガイドに電話すると「問題ない、そのうち集まる」と。15分位してちらほら集まる。怒っちゃいけない、こ



泰山_中天門付近



泰山入口



泰山_登山途上



泰山_登山途上



泰山_十八盤



泰山_海拔 1,000m 付近



泰山_十八盤(ここから霧)



泰山_十八盤



泰山_南天門



泰山_もうすぐ南天門

れぞ中国式。入口で入場券（門票）を買う。中国の門票は、一般人の他、子供・学生・老人・身障者等の割引があり、団体で買う時も、割引の人は身分証や証明書を提示して買うため面倒で時間もかかる。

泰山は中国五岳の一つで、秦の始皇帝や前漢の武帝、後漢の光武帝、章帝、唐の高宗皇帝、玄宗皇帝、宋の眞宗皇帝などは皆、泰山で封禅儀式（天帝に天下統一を報告し天地の神

を祀る儀式）を行ったそう。また、清の康熙帝と乾隆帝は何回も登ったそうで、孔子含め有名人も多く登っている。世界複合遺産（自然＋文化）にも登録されている。

専用バスで中間地点の「中天門」へ。ここで、徒歩組とロープウェイ組に分かれる。泰山は自力で登った方が縁起が良く、と聞いていたので迷わず徒歩組に。泰山は海拔1545mとそんなに高い山ではないが、麓は海拔ほぼゼロなので思っ



泰山_天街



泰山_南天門



泰山_五嶽独尊 石碑



泰山_天街



泰山_玉皇頂



泰山_山頂



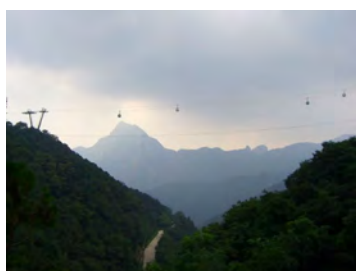
泰山_下りロープウェイ



泰山_日觀峰



泰山_全景



泰山_下りロープウェイ

たより高く感じ、登山もきつい。中天門からは雲歩橋、望人松、五松亭、対松亭と登って行く。ここから升仙坊を経由して南天門までの約1 km (約1600段) は「十八盤」と呼ばれ最も険しいところ。この辺りから霧が急に濃くなり10 m先が見えない。100段毎に休みながらゆつくり進んだ。荷担ぎ人夫が重い荷物を背負ってゆつくりとリズムを取って登っていく。これが仕事とはいえ大変だ。

10時に登り始め11時40分に南天門到着。かなりへばったが予定時間の12時半よりかなり早く着いた。他の人が登ってくるのを待っている間に昼食を取った。南天門から先は、特にきつい所は無く、天街、唐摩崖、碧霞祠、玉皇頂と続く。天街には、ホテル・レストラン・みやげ物店が並んでおり賑やか。とにかく石碑が多い。中でも唐摩崖の刻石は唐の玄宗皇帝が書いた「紀泰山銘」という石碑で大きい。1千文字書

かれています。また、有名な「五嶽独尊」（中国五岳の中で一番という意味）の文字もある。ただ、どこもかしこも霧また霧で視界が悪い。日の出の名所「日観峰」も霧の中だった。

下山は時間の関係でロープウェイを利用。怖いけど止むを得ない。下山途中から急に霧が晴れ日が差してきた。山の上の方は相変わらず霧の中。中門から専用バスで麓まで戻る。麓から泰山の雄姿がきれいに見えるが、奥の奥にある山頂付近はここからは見えない。バスに2時間半揺られ済南へ戻る。時間の関係で済南での観光は断念し、空路北京に戻った。

15. 重慶・大足

2006年8月4日～6日

西安出張の週末を利用して「重慶」と世界遺産の「大足石刻」を観光した。

「1日目」

夕方、重慶空港着。リムジンバスで重慶市内へ。ホテルで

〈スケジュール〉

7/28(金) 北京→済南 MU5138(21:05-22:05)

7/29(土) 泰山曲阜2日ツアー参加(曲阜)

7/30(日) 泰山曲阜2日ツアー(泰山観光)

済南→北京 CA1159(20:20-21:10)

軽く夕食をとった後、有名な重慶の夜景を見に行く。タクシーの運転手に聞くと、長江を渡って対岸の高台の南山植物園がベストだと言うので早速行つて貰う。重慶は長江と嘉陵江に挟まれた半島状の丘陵で、別名「山城」と呼ばれる様に坂が多い。自転車は殆ど見掛けない代わりに、「棒棒軍」と呼ばれる天秤棒の様な棒を持った荷物運び屋さんが至る所にウロウロしている。この日は天気も良く、長江対岸の高台からは重慶の夜景がとてもきれいに見えた。

「2日目」

翌早朝「解放碑」付近を散歩。この辺りは重慶最大の繁華街で高層ビルも多い。

8時半、「大足石刻1日観光ツアー（昼食付で220元）」に出発。各ホテルを回って参加者を長江河岸の旅行社に集結させツアー毎に振り分けて出発させている。



重慶_長江河岸



重慶の繁華街



重慶の夜景

約3時間で「大足石刻」のひとつの「宝頂山石刻」に到着。昼食後、石刻を約3時間見学。素晴らしいがほぼ想定の範囲かな。見学を終えバスに戻ったが、みんな中々戻って来ない。中国人ツアーはいつもこんな感じで30分遅れは良い方だ。また、帰る途中には例によって買物タイムがあり、18時過ぎにやっと重慶に戻った。夕方はまた「解放碑」付近を散歩。久し振りにフライドチキンが食べたくなり夕食はケンタッキ



大足石刻



大足石刻



大足石刻



大足石刻



大足石刻



大足石刻



重慶_解放碑



大足石刻

「3日目」

早朝便で北京へ戻る。今回はマイレージ航空券を利用したが、エコノミー席が空なで、初めてファーストクラス席を利用した。ただ、あまりメリットを感じなかった。

＜スケジュール＞

8/4(金) 西安→重慶[CA4242(16:30-17:30)]

重慶夜景(南山植物園) 重慶賓館泊

8/5(土) 大足ツアー参加 重慶賓館泊

8/6(日) 重慶→北京[CA1412(7:40-9:55)]

へ。
ところで、重慶は中国の「三大ストーブ(火炉)」の1つ数えられる蒸し暑い所(他は武漢と南京)。特に今年は最高気温が44.5度の日もあり凄まじかった様だ。雨も少なく渇水が続いたとのこと。

16. 洛陽・安陽・鄭州 ㊤㊦

2006年8月18日～20日

今回は初めての夜行列車の旅。世界遺産の龍門石窟の他、少林寺や黄河も観光予定。

「1日目」

夜、北京西駅を河南省の洛陽行きで夜行で出発。中国の夜行寝台車は初めての体験。軟臥（二等寝台）と硬臥（二等寝台）



龍門石窟入口



洛陽_廣化寺



龍門石窟



龍門石窟



龍門石窟_宝泉寺廬舎那仏



龍門石窟_宝泉寺廬舎那仏



洛陽_白馬寺



龍門石窟全景

「2日目」

があり、軟臥は2組の2段ベッドで1部屋（コンパートメント）構成。一方、硬臥は2×3段ベッドで部屋にドアが無い。車内では洛陽出身の人と楽しくおしゃべりして23時に就寝。ベッドは私の身長（186 cm）でも十分で寝心地も良い。

朝8時半に洛陽に到着。ホテルへチェックイン後、タクシーと1日430円で貸し切りの交渉が成立。先ず、今回の最大の目的の龍門石窟へ。途中、真言宗（空海）縁の寺と言われる廣化寺を立ち寄って見学した後、石窟入口へ。

龍門石窟は伊河の兩岸に沿って石窟が続いており、全体が風光明媚な所で、特に、東山から見える石窟の全景は圧巻。また、宝泉寺の廬舎那仏は、龍門石窟のシンボリック的存在、端正な顔立ちで美しい。唐の武則天（則天武后）をモデルにしたと言われる。2時間か



白馬寺の斉雲塔



白馬寺の斉雲塔



少林寺_塔林



少林寺_塔林



少林寺_十三和尚救唐王



少林寺



少林寺_演武



少林寺_武術館



殷墟_甲骨文碑廊



殷墟_殷代車馬坑

け、西山・東山・最後に白園（白居易の墓）と見てまわる。
この後白馬寺へ。仏教伝来後最初に建てられた寺院で、シンボルの斉雲塔（高さ35m）が印象的だ。
午後は少林寺へ。少林寺にある壁画…十三和尚救唐王の前では、日本の少林寺拳法の団体は記念写真を撮っていた。また、有名な武僧脚坑を見ようとしたが中々見つからず散々探した末にやっとたどり着いた。少林寺と塔林を見学し、最後

に少林寺武術館で演武を観賞し、18時過ぎに洛陽に戻った。
無理して一日で少林寺まで見てしまったので、欲が出て、安陽にある殷墟へ行きたくなった。調べてみると、安陽は洛陽から列車で3時間強、しかも早朝3時発で立席乗車券しかなかったが、今年8月に世界遺産になったばかりの殷墟を見たいという意志が勝って強行することとした。
深夜2時半起床、3時の列車に飛び乗る。ウルムチからの



安陽_殷墟



安陽_殷墟入口



鄭州_黄河遊覧区



鄭州_黄河遊覧区



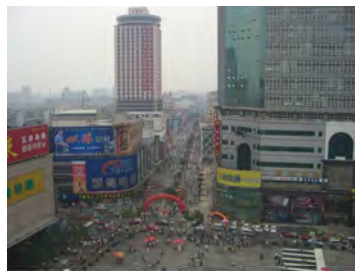
鄭州_二七塔



鄭州_黄河遊覧区



鄭州_商代遺址



鄭州の繁華街

〈スケジュール〉

8/18(金) 北京西→洛陽 K269(19:51-8:22)
 8/19(土) 龍門石窟・白馬寺・少林寺観光
 8/20(日) 洛陽→安陽 T70(3:04-6:19) (立席)
 安陽→鄭州(高速バス) (9:50-13:00)
 鄭州→北京 CZ3175(19:50-21:00)

夜行で車内は満員で、座るところか床に寝ている人もいて立つ場所の確保に一苦労、眠くて長い3時間だった。駅前でタクシーを拾い、屋台で朝食(2元)、8時を待って殷墟を見学。以前は入場無料だったが世界遺産になってから有料(50元)になったようだ。「殷代車馬坑」「甲骨文碑廊」が印象的。

9時50分発の高速バスで3時間かけて鄭州へ。先ずタクシーで北西30kmにある黄河遊覧区へ。入口からは電動車で河

辺に行く。水に触ってみると、やや温め、その名と通り濁っている。右手には鉄橋がその遙か先に対岸が見える。さすがに広い。電動車は既に戻ってしまい、この後の交通手段はバイクしかない。ちよつと怖かったが、90元を払いバイクの後ろに乗って黄河が見渡せる高台の観光スポットを幾つか回った。帰りは路線バスで鄭州市内へ。この後、大急ぎで、「二七塔」と「商代遺址」の2ヶ所を見て、空港行きのリムジン

バスに飛び乗った。何とも忙しい、駆け足の旅だった。

17. 大同・フフホト ㊸

2006年8月25日～27日

今回は世界遺産「雲崗石窟」で有名な山西省「大同」と内モンゴル「フフホト（呼和浩特）」の2ヶ所を目指す欲張った計画を立てた。

「1日目」

夜、北京西駅23時30分発の大同方面行きの夜行列車（寝台車）で出発。

「2日目」

早朝に大同着。先ず、翌日のフフホト行きの切符を買う。中国では航空券は何処でも買えるのに列車の切符は乗車駅でないと買えないので不便だ。早朝5時発でしかも立ち席。4時間立つのはきついが仕方ない。その後、雲崗石窟と懸空寺のツアーを扱う旅行社を探して申込む。

ツアー出発まで少し時間があつたので、タクシードで大同市内の観光に出かけ、九龍壁、華嚴寺、善化寺の3ヶ所を見て回った。愛想の良い運転手でガイドもしてくれた。

9時にツアー開始。雲崗石窟、懸空寺の2ヶ所を観光で、中国国際旅行社のツアーだったせいか参加者は私以外全て欧米人、今迄とちよつと勝手が違

う。中国の歴史や固有名詞の英語での説明にちよつと戸惑う。雲崗石窟は大同の西16㍿、武周河の北岸岩壁に東西1kmにわたり彫られた雄大な石窟群で、洛陽の龍門石窟、敦煌の莫高窟と並ぶ中国三大石窟の一つ。第20窟にある高さ14mの微笑する大仏、第9～13窟にある飛天や伎楽天のレリーフは必見だ。

懸空寺は90度以上の崖に支え棒をして建っており、文字通



九龍壁



九龍壁



雲崗石窟



善化寺



雲崗石窟



雲崗石窟



雲崗石窟



雲崗石窟

り、空に吊り下がっている。高所恐怖症の私としては腰が退けたが、何とか見て回った。

17時に大同に戻る。ホテルで、フフホトへは列車よりバスの方が便利との話を聞き、早速、乗り場で調べると、所要4時間で46元。しかもまだ最終便がある。思い切って今日行くことにした。急いでホテルと列車をキャンセルし、フフホトのホテルの予約を電話で手早く済ませバスに飛び乗る（このあたりの動きはだいぶ旅慣れしてきた感じだ）。バスは18時出発のはずが中々出発しない。

この手のバスは満員になるまで人引きをしてから出発するようだ。出稼ぎ風のモンゴル人団体が20人位集まってきて一旦乗り込んだが降りてバスの関係者と何か口論をしている（内容は不明）。1時間以上待たされてやっと出発。バスの中は殆どがモンゴル人労働者風でちよつと怖い。途中、予約したホテルから2度程電話がかかってきた。日本人と名乗った上に中々到着しないので心配したようだ。有り

難い。深夜0時にやっとフフホトに到着。タクシーでホテルへ行きチェックイン。明日の「草原ツアー（料金180元）」をその場で予約した。

「3日目」

朝8時出発。ガイドを含め総勢10名で私以外は全て中国人。家族連れや老夫婦の他、出張ついでに参加した上海の青年。彼とは一人旅同士なので色々話をした。ソフト開発の仕事をしているそう。

2時間強で「希拉穆仁」草原に着。入り口でモンゴル族の貸衣装（15元）を着て、馬に乗り換え（別料金で3時間150元）、更に



懸空寺



懸空寺



懸空寺



蒙古語のマックの看板

1時間進む。私の馬はやや遅れ気味。馬の扱いが全く分からず最初は馬任せ、そのうち右・左とは覚えたが、進むと止まれば何だったか未だに不明。草原は風が強く、砂埃で顔はザラザラ。草は既に盛りを過ぎて黄色っぽく禿げだらけ。尻の痛みが増してきた頃に目的地に到着。馬糞に注意しながら下馬。モンゴル族の家庭を訪問しお茶やお菓子を御馳走になる。その後、各自各様に草原で過ごす。私は仰向けに寝ころがる。この辺りの草は丈が長く蒼さも残っている。現地人とも色々話をしたが、「貴方はモンゴル人に似ている」と言われた。帰りは大きな馬に乗り換え（さっきの現地人が気を効かせて替えてくれた）、また1時間かけて戻った。昼食後、競馬やモンゴル相撲を見物して帰路に着いた。

16時半にフフホト市内へ入ると、例によって提携店に連れて行かれ買物タイム。私はここでツアーを離脱しタクシーで市内観光。「金剛座舍利宝塔」、「大召」、「席力图召」の3ヶ所



フフホト_パオ（住居）



フフホト_草原



フフホト_草原にて

を見て回った。その後、マッサージ店で時間を潰し、深夜便で北京に戻った。



フフホト_金剛座舍利宝塔



フフホト_モンゴル相撲



フフホト_馬に乗って

＜スケジュール＞

8/25(金) 北京西→大同 N205(23:29-6:50) 軟臥上(153+50 元)

8/26(土) 大同市内・雲崗石窟・懸空寺観光(CITS ツアー) 225 元(門票, 昼食付)

大同→フフホト(19:20-23:40)バス(46 元)フフホト 天元大酒店泊(220 元)

8/27(日) 8:00-16:30 草原ツアー(希拉穆仁草原) 380 元

16:30-18:00 フフホト市内観光 フフホト→北京 CA1127(23:50-1:10)

18. 武当山・襄樊・武漢 ⑭

2006年9月15日～17日

今回は、世界遺産の「武当山古建群」を見るのが主目的でHさんと二人旅。

「1日目」

夕方、北京西駅を重慶行き夜行で湖北省北部の「十堰」に向けて出発。15時間の長丁場だ。列車内で重慶の老夫婦と一緒にになる。とても元気で81歳（1925年生まれ）には思えない。ずっと軍人だったそう。食堂車で夕食。初めての体験だが、料理（茄子炒め他）は冷めていて残念だった。

「2日目」

翌朝、十堰駅で下車すると客引きが待ち構えていた。1日400元と言ってきたが断り、タクシーで武当山入口へ。ここからは



寝台車



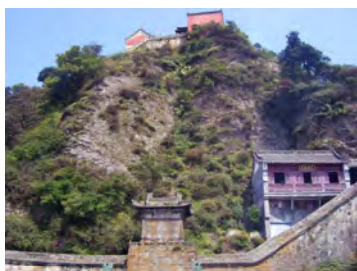
列車内の食堂で



武当山ロープウェイ



武当山_金殿(金頂)



武当山_金殿(金頂)



武当山_金殿(金頂)から



武当山_南岩宮



武当山_南岩宮

タクシーや一般車は乗入れ不可で、全て専用バスで移動。入場券（門票という）込みで182元と経済的かつ合理的。駅で客引きの話に乗らなくて正解だった。山門から専用バスでロープウェイ乗り場まで約30分かけて山道を上る。今日は晴天で気温も丁度良く快適。遠くまで良く見える。

最短の1日観光のため主要部分を駆け足で見学。午前中は



武当山_南岩宮



武当山_南岩宮



武当山_南岩宮



武当山_逍遙谷



襄陽城壁



武当山_世界遺産の碑



襄陽_漢江を泳ぐ人々



襄陽_漢江



武漢_長江



襄陽_夫人城

「金殿（金頂）」、昼食後に「南岩」を観光し、最後に「逍遙谷」を見て出発点に戻る。Hさんは寝不足でバテぎみ。来週は友人と二人で九寨溝へ行くそうだがやや心配。

17時、宿泊地の「襄樊」へ向かう際に、バスでなく乗合の客引きの車の方に乗ってしまった。客が集まるまで40分以上も待たされヤキモキしたが、出発すると凄いスピードでとばし1時間半で到着した。

先ずは長距離バスターミナルで明日の武漢行きチケットを購入したが、あとで時刻表を見ると、19時発の最終便がまだあった。今日中に武漢まで行った方が明日のスケジュールがずっと楽になるのだが、その時点では気が付かず後でちよつと後悔した。

チェックインした「南湖賓館」は江沢民も泊まったことのある由緒あるホテルで、「襄陽城壁」の近くの公園内にある。

が近くにある。是非とも行きたかったが時間が無く断念。

「3日目」

早朝、「漢江」の流れを見に「夫人城」という城壁に行った。よく見ると多くの人が泳いで河を渡っている。冬でもやっているとのこと。漢江は比較的きれいらしい。

8時に襄樊を出発し13時前に武漢着。まずは有名な「黄鶴楼」へ。10年前に再建されたとのことで美しくまた堂々としている。その後、長江と漢江が交わる景色を見ようとガイドブックに従い対岸の「亀山」に登り迷いながら歩き回ったが、木々が邪魔になって展望ポイントにたどりつけず。次の「晴川閣」の上からやとと見ることができた。

15時過ぎにマックで遅い昼食。最後はとにかく疲れた。空港ラウンジで交渉してHさんも無理やり入れて貰いゆっくり休んだ。



武漢_黄鶴楼



武漢_黄鶴楼

「襄樊」
は三国志
ゆかりの
古い街で
「三顧の
礼」の舞台
になった
「古隆中」



武漢_長江大橋



武漢_三国志像(亀山)



武漢_黄鶴楼からの眺望

〈スケジュール〉

9/15(金) 北京西→十堰 T9(16:25-7:15) 軟臥

9/16(土) 十堰→武当山(タクシーで1時間) 武当山観光

武当山→襄樊(17:30-19:00) 襄樊泊[南湖賓館]

9/17(日) 早朝 襄陽城観光 襄樊→武漢(武昌) 長途汽車 No. 461 8:00-12:30 (347km)

武漢観光 16:30 タクシーで空港へ(40分)

武漢→北京 CA1366(18:15-20:00)

19. 集安・瀋陽 ②⑥③③

2006年9月22日～24日

今回の旅では、世界遺産を見る以外にもう一つ「北朝鮮を直に見る。可能なら国境線を越える」という期待がある。集安は、近くに空港が無く、日に1～2本の列車と車を乗り継いでたどり着く辺境の地で、しかも週末のみで行ってくる超ハードな旅。Hさんと一緒に行こうと前から話していたが、どうしても都合が合わず一人旅となった。

「1日目」

午後、半日休暇を取って、北京駅14時10分発の夜行列車で吉林省の通化へ向かう。夜行列車はこれが4回目なので慣れていたが16時間半もの長丁場は初めて。席は寝台車（軟臥）の下側。2段ベッド2組の4人が1コンパートメント。瀋陽への出張の男性と、通化まで行く60歳の女性が一緒だった。この女性とは最初お互いに言葉が判り難くてあまり話をし



北京発-通化行き夜行列車

なかったが下りる頃にはかなり打ち解けて話ができた。今回はPCを持ち込んで、まずはやり残した仕事を片付けた。車内には電源コンセントが各席に設置されておりとても便利だ。PCが使えたため列車内で暇を持て余すことは無かった。

「2日目」

翌朝、目を覚ますと外は濃い霧で別の世界に來た感じ。

ほぼ定刻（6時42分）に通化着。おばさんと握手をして別れる。列車を下りると寒く、10度以下の感じ。目的地の集安はここから更に100km以上先。駅を出てタクシーを

探す。見ると集安までの乗合タクシーが客引きをしている。値段を聞くと40元、通常だと最低120元かかるところ安くあげることができた。子供連れの男性と若い女性2人と相乗りし、濃霧が立ち込める細道をライトを点けて猛スピードで突っ走る。車窓からは秋の景色、紅葉が始まっている。稲穂は黄金色で刈り取り寸前、トウモロコシもいたる所に見える。道の両脇には秋の草花がずっと植えられているのに感心した。特にコスモスがきれいだ。

1時間半で集安着。先ずホテルにチェックイン。電話で予約した時は220元だったのに再度尋ねると180円で得した気分。この辺では有名な3星ホテルだが設備は値段相当で、トイレとシャワーと洗面所が一体化。ただ、飲料水サーバがあるのが有り難い。

ロビーでガイドの金さんと待合せ。最近ではガイドを雇わな



集安市内のタクシー

いことが多いが、集安は現地情報が少なく、また北朝鮮近くであることを考慮し、今回は200元出して日本語ガイドを雇うことにした。金明竹さん、小柄な朝鮮族の方で45歳、高校生の子供がいるようだ。車は彼の知り合いから140元でチャーター。ちよつと高めだが妥協した。

最初は「丸都山城」へ。城壁の跡が所々に残っているだけで殆ど石が崩れてしまっている。その隣に貴族の古墳群があり、こちらは数も多く壮観。一面にクローバが咲いていた。この後「五盔墳」や、歴史で習った「好太王碑」、「將軍墳」と回った。そして最後は、北朝鮮との国境を流れる「鴨緑江」をモーターボートで遊覧する予定だったが、水量不足で運行停止とのこと。今日はたまたま上流のダムが放水を止めたためだそうだが、一番期待していたのに残念だ。

鴨緑江の川辺から対岸の北朝鮮の風景がよく見える。特徴的なのは、山の上の方まで木が伐採されて畑になっているこ



貴族の古墳群



丸都山城



好太王碑



將軍墳



將軍墳

と。食糧事情が逼迫しているためだろうが、伐採で洪水が起こり易くなり、長期的には逆効果だと思う。集安は漢民族が多いが、少数民族の中では朝鮮族が最も多い。1950〜60年代に北朝鮮から移り住んだ人も多く、中国側から北朝鮮の親戚を訪問することが日常茶飯事だそう。手続きは非常に簡単で身分証と訪問先を書いて申請するだけでOKとのこと。但し、逆方向（北↓中）は殆ど無しとのこと。北朝鮮からは、松の実、蛙の油、天然資源（銅など）が持ち込まれ、中国からは、電化製品（テレビ等）の他、時にはバイクも持って行くとのこと。

昼食は金さんと一緒に朝鮮料理。冷麺と小豆腐（豆腐十才カラ）、野菜天ぷらもどき（名前不明）、ビール2本で62元。特に小豆腐が美味かった。

午後はホテルで一休みして地図を見ると、集安市内から十数キロ先に鴨緑江に掛かる鉄橋があるのを見つけた。国

人だ」と応えると、「OK、入れ」。入口の鎖を跨いで施設内に入り、事務室で担当の若い兵隊さん（20歳だそうだ）にパスポートを見せ20元を払い見学許可証を書いてもらう。階段を昇り橋の入り口で監視の兵隊



鴨緑江大橋



橋を歩いて北朝鮮方面へ



北朝鮮国境線



北朝鮮国境線から戻る

境大橋とも呼ばれ鉄道が北朝鮮の満浦市へ延びている。前にWebで調べた時、確かある旅行社が「当社は関係筋とコネがあり、特別に橋の上の国境線を跨いで北朝鮮側にちよつとだけ入れます」と書いてあったのを思い出した。コネが無くとも行けるかも知れないと思い、早速タクシーを跳ばして現地へ。

国境大橋に着くと、鉄橋の前は軍の施設で入口に監視兵が一人。「見学できるか？」と聞くと、「外国人か？」「日本



鴨緑江 対岸は北朝鮮



対岸の北朝鮮風景



対岸の北朝鮮風景

さんに許可証を見せると、「あつちだ」と。前を見ると、橋の上は鉄道が走っているだけで、その左脇にコンクリート板を敷いた50cm幅の細い通路がある。手摺りはあるが、コンクリートの間から下が丸見えで高所恐怖症の私には辛過ぎる。が、折角ここまで来て引き下がる訳には行かない。やつとの思いで200m歩き国境線に到達。先客（3人の若者）がいて中々退かない。じっと待つこと1分（気持ち的には10分くらいに長く感じた）、やつと国境線越え（たつた3m位）を体験。写真を撮りまくった。国境越えに旅行社のコネは不要だった。

帰りがけに「国内城址」を見てホテルに無事帰還。昨日からの疲れもあり横になったら3時間も寝てしまった。夕方、金さんに教えて貰った「若石」という名前のマッサージ店へ。旅先ではよく地元のマッサージ店に行く。疲れをとるのも目



瀋陽_福陵(東陵)



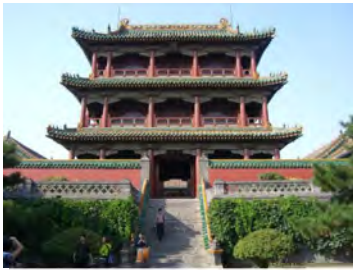
瀋陽_福陵(東陵)



瀋陽_故宮



瀋陽_故宮



瀋陽_故宮



瀋陽_故宮



瀋陽_昭陵(北陵)



瀋陽_昭陵(北陵)

「福陵（俗称…東陵）」、「瀋陽故宮」、「張學良旧居」、「昭陵（俗称…北陵）」とまわる。「瀋陽故宮」は北京の故宮より規模が1桁以上小さいが見るのには丁度良い感じ。

12時に瀋陽に到着。滞在可能時間は6時間しかない。直ぐにタクシーを拾って値段交渉、半日拘束…200円で手を打つ。麦当労（マクドナルド）でテイクアウトしたビッグマックスセット（16元）を車内で食べながら、

「3日目」
早朝、近くの店で朝食（3元）を手早く済ませ、瀋陽行き
的のひとつだが、地元の人とその土地の様子など世間話をするのが何より楽しみだ。2時間で40元と安いが腕は中々だ。夕食も朝鮮料理を食べようと昼食の店に行つて見たが既に閉店。未だ8時半。北京の感覚ではダメのようだ。何とか店を探し、質素な食事（炒麵＋土豆絲で8元）を済ませた。

最近、浅田次郎著「中原の虹」第1巻（張作霖の物語で「蒼穹の昴」から話が続いている）が出たので読んだが、その舞台が瀋陽（奉天）や隣の新民市。バスで通るかかった「永陵」は乾隆帝が中華皇帝の「龍玉」を隠した場所との設定だったので親近感が湧いた。

「福陵」と「昭陵」は典型的な皇帝の墓。「張学良旧居」はローム様式の「大青楼」が印象的だった。※張学良は張作霖の長男

17時過ぎに観光終了。運転手はあと100元出せば空港まで送ると盛んに進めるが、リムジンだと10元で行けるのを知っていたので遠慮。早夕食（揚州炒飯＋小籠包…16元、小籠包が美味しかった）を済ませ空港へ。空港では3時間も待ち時間があつたが、写真と旅行記の整理に有効活用できた。

北京には予定通り22時半過ぎに到着した。



張学良旧居

＜スケジュール＞

9/22(金) 北京→通化(14:10-06:42) 軟臥下

9/23(土) 通化→集安[タクシー相乗り(1.5h) 8:30 着
翠園賓館伯(3☆)]

9/24(日) 集安→瀋陽 長途汽車 6:20→13:00 417km

18:00 リムジンで空港へ(40分)

瀋陽→北京 CA1626(21:25-22:40)

20. 貴州省

2006年10月3日～4日

国慶節を利用して貴州省へ1泊2日の旅をした。
「1日目」



農村風景



農村風景

11時に貴陽着。空港でガイドの劉さんと待合せ、そのまま「黄果树瀑布」へ。昼食は車の中でのパンで済ました。天気は予報が外れ晴天、絶好の旅行日和だ。車窓からカルスト地形の山々がずっと続いて見える。先の丸まった山の斜面には灰色の岩（石灰岩）が剥き出ししている。貴州省はカルスト地形がとても多く全面積の7割を占めるそう。そう言えば「桂林」はここからそんなに遠くない。この辺は稲作が多く今が刈り取りシーズン。岩がゴロゴロしている中でみんな手作業。大変そう。山の斜面は上の方まで段々畑でトウモロコシの他、見たことのない作物も見える。家はほとんどが石灰岩を利用した石造りだ。また、ここ貴州省は「少数民族の故郷」とも呼ばれる。人口の3分の1は少数民族。特に、苗（ミャオ）

故郷」とも呼ばれる。人口の3分の1は少数民族。特に、苗（ミャオ）



黄果树瀑布



黄果树瀑布



黄果树瀑布_滝の裏から



黄果树瀑布



黄果树瀑布



黄果树瀑布



龍門飛瀑



黄果树瀑布



龍宮



龍門飛瀑

族・布依（ブイ）族・侗（トン）族が多いそうだ。
約1時間半で「黄果树瀑布」に到着。高速道路はここまですの先は工事中。最終的には雲南省の「昆明」までつながるそうだ。連休だけあつて凄い混雑。入口から15分程歩いて下りて行くと、アジア最大の滝「黄果树瀑布」見えてきた。さすが大きい。高さ74m・幅81mだそうだ。今は喝水期で水量が少なめらしいがそれでも凄い。滝の裏側は天然の鍾乳洞

になっていて歩いて通り抜けられる。滝の脇から裏側へ回るとその迫力たるや凄い。水しぶきで服も髪もずぶ濡れ、カメラを庇いながら写真を撮る。かなり長いこと歩いて反対側の出口にたどり着いた。これだけで来た甲斐があり。エスカレーター（10元）を利用する人を横目に自力で登って戻った。
15時、次の目的地「龍宮」へ向かう。この付近は滝が多いが喝水期の今は干上がって岩肌だけ見えているものが多い。



龍宮



貴陽市内のお店



甲秀楼

途中、カルストの丸山・段々畑・稲刈り風景を見ながら、約40分で「龍宮」に到着。鍾乳洞はこれまで何回も見ているので余り期待していなかったが、「龍宮」の洞窟はなかなかのものだ。特徴は、①すごく広い、②大きな池「天池」に繋がっていてボートで洞窟内をまわれる、③洞窟の中に大きな滝「龍門飛瀑」がある、の三点だ。洞窟はかなり奥まで行けるようだが時間の関係でボート遊覧の終点で引き返した。

19時に貴陽のホテルに到着。ガイドの劉さん、運転手の呉さんと一緒に夕食。劉さんは26歳。地元の大学を卒業後、深圳の日系企業（セイコー）で2年間働いた経験があるそう。劉さんの案内で、苗族料理の店「老凱里酸湯魚」へ。人気の店だそうで大盛況、店の外までテーブルが出ている。この店の名物料理である「江黄魚」という名前の野生魚の鍋を注文。魚もスープもとても美味しい。この他、日本の納豆に似てい

ると言われる「豆鼓」（但し糸は引かない&辛い）、小米（粟）、細い茎のような薬膳菜（確か湘西でも食べた記憶有り、不味い）にも挑戦。地元の酒は18度で梅酒のような味がした。3人で腹一杯食べて134元（約二千円）。大満足。

「2日目」

翌朝は小雨。主要な所は昨日見たので今日はゆっくり。市内の名所「甲秀楼」を観光し、帰りは30分かけて歩いて戻った。貴陽市内は、建設ラッシュで他の都市とあまり変わらない。少数民族と判る格好の人も思った程多くはないが、特有の籠を背負った人が歩いているのが特徴的だ。

14時にホテルをチェックアウトして帰路に着いた。

<スケジュール>

10/3(火) 北京→貴陽 CA1461 (8:25-11:10) ガイドと専用車で黄果樹へ(137km 2.5H)

13:00 黄果樹瀑布 15:40 龍宮洞窟 19:00 夕食 in 老凱里酸湯魚

神奇金筑大酒店泊

10/4(水) 貴陽市内 甲秀楼 貴陽→北京 CA1462 (16:45-19:30)

21・チベット ⑩

2006年10月11日～15日

会社の同僚のY君とチベット（西藏）に4泊5日で旅行した。今回は私が往復とも空路、Y君は今年開通した青藏鉄道にどうしても乗りたいというので行きは列車（所要48時間）で帰りは飛行機となった。ただ、青藏鉄道の切符は入手が非常に困難で友人のコネで何とか入手。更に、二人の日程の関



ヤルツォンボ河



チベットの山（機内から）



ヤルツォンボ河（着陸時）



ヤルツォンボ河



ホテル付近の通り



香巴拉ホテル

係で1日ずれた変則ツアー（彼が先に入り先に帰る形）となり、結局、現地では2日間一緒に観光した。

「1日目」

朝、北京空港から成都経由でラサに向かう。経由地の成都を飛び立ったとたん聞き慣れない言葉で機内アナウンスが流れる。多分チベット語なのだろう。最初にチベット語、次に普通話、時には英語も混じり、何か違う国に来た感じがした。

事実、我々外国人がチベットに入る際には事前に旅行社経由で許可証を取得する必要があると面倒だ。

四川風の辛い機内食を食べていると突然雪山の景色が見えてきて思わずシャッターを切る。

予定より約1時間遅れの午後3時半にラサ（拉薩）到着。天気は晴れ。迎えの車に乗り、途中のラサ川の綺麗な景色を右手に見てラサ市内へ入り、「ポタラ宮」の前を通り1時間強でホテルに到着。部屋はスイートに当たり、応接間・ジャグジー風呂付き。一瞬ラッキーと喜んだが、その立派な風呂が不調（湯の出が悪く温度も低め）で最後まで苦労した。高度順応のため暫くホテルで休息した後、先に来ていたY君と一緒に夕食。標高3650mの高地のせいか少し気分が悪くなってきた。Y君は初日から張り切って歩き過ぎたらしく、高山病の症状でぐった

りで食が進まない。食後、二人で街を散歩。ホテルの近くには「ジョカン寺（大昭寺）」もあり賑やかで、寺の前では、夜にも関わらず、両手・両足・額を地面につける「五体投地」で祈りをしている人がいる。

夜は早めに寝たが高山病（頭痛と呼吸困難）が酷くなり、3時過ぎにやっと浅い眠りに就いた。

「2日目」

朝、まだ高山病症状が続いて食欲が無かったが、頑張って食べたらずし元気になった。今日は終日ラサ市内観光。午前からは歩いてジョカン寺へ。チベット仏教の総本山だけあって朝から大勢の巡礼者が訪れており、寺院の前では五体投地で祈り、本殿の中では列をなしてお堂巡りをしている。灯明に使うバター（ヤクの乳製らしい）の燃える匂いが辺り一面に立ち込めている。唐の時代に「文成公主」がチベットに嫁いでくる際に唐の都から持ってきたといわれる「釈迦牟尼像」を



ポタラ宮（夕方）



ポタラ宮（夜景）



五体投地の祈り



ジョガン寺屋上



ジョガン寺屋上からの眺め

に承德で見た所謂「ミニポタラ宮」とは全くスケールが違う。この見学は事前予約制で許可証とパ

見た後、本殿内の巡礼路をチベット式に時計回りに一周、最後に屋上に登り、金瓦の屋根とその間から「ポタラ宮（布達拉宮）」の遠景を見た。その後、ジョカン寺の外の巡礼路「バイコル（八角街）」を一周、散策。ここは市場や土産物屋が立ち並びバザールで庶民のエネルギー溢れている感じ。中国の各観光地で見られる強引な呼び込みも少ない。

昼食まで時間が空いたのでホテル脇のコーヒESHOPで一休み。欧米人が多くラサ版スタバという感じでの店でコーヒーも美味しい。無線LANやパソコンも揃っている。

昼食はチキンカレーセットを注文。味はまずまず。後で聞いた話だが、チベット人は鶏の様な小動物は食べないとのこと、また魚もあまり食べないとのこと（水葬の習慣の関係から）。

13時からポタラ宮を見学。天空にそびえるが如く大きく、高さ117m、東西360mもある。部屋は一千もあるそうだ。以前



ポタラ宮へ



ポタラ宮全景



ポタラ宮への登り口



ポタラ宮への登り口



ガンデン寺



ポタラ宮の「白宮」



ヤクとの遭遇

スポーツが必須、しかも見学時間は1時間以内の制限付。「之」字形のジグザク階段を、呼吸を整え一歩ずつゆっくり上って行く。かなりきつい。因みにダライ・ラマは裏から馬に乗って入口まで行くそうだ。

見学は、ダライ・ラマの居室があり政治を行う「白宮」側から入り、歴代ダライ・ラマの廟があり宗教儀式を行う「紅宮」へとまわる。ほとんど止まらずに見てちようど1時間。

14時半過ぎに正面に戻ってきた。

今日はこれでお終いとガイドが言うが、時間をもったいないのでちよつと遠い(片道65km)が「ガンデン寺(甘丹寺)」に行くことにした。旅行社の運転手と交渉したら1人で700元、2人で1100元と吹っかけるのでタクシーを選択。交渉の結果300元。ラサ(キチュ)川沿いに東(川上方面)へ向かう。タクシーはかなりのボロでよく見るとスピードメーターが壊れて動かない。1時間程の所で甘丹寺への標識を発見するも、その先に通行止め表示あり。諦めず何とか迂回路を見つけて先に進むと、そこから先は細い砂利道。埃を舞あげながら延々と山登りするも終点が見えてこない。途中で道路工事で10分近く待たされた後、更に30分近く登ってやっと目的のガンデン寺の前に到着。山の斜面に階段状にいくつもの建物が建っており山城のようだ。海拔は4300m、ラサから600m以上登ってきたことになる。ヤクが近くに

きたので一緒に記念写真。満足して戻る。それにしても、こんな悪い道を苦にもせず行ってくれたタクシーの運転手には感謝・感謝。100元プラスして400元を渡した。因みに、運転手は、黒竜江省(牡丹江出身の漢族で、娘さんが大阪の大学に留学中とのこ

と。

夕食はチベット民族舞踊観賞付き。欧米人ばかりで日本人はゼロ。夜は高山病で寝つけず。4時頃から少し眠れたが、浅い眠りの中で久し振りに子供の頃に見たような怖い夢を見続けた。

「3日目」

頭痛は残っているが酷くはなく、昨夜の睡眠不足もあまり感じない。今日はラサ郊外の「カンパラ峠」を越えて、神秘的な湖「ヤムドク湖」までの片道200kmの旅。天気は曇りで所々青空が覗いている。

朝9時出発。車は時速90kmの猛スピードでラサ川沿いの村々を通り抜け南西（川下方面）へ向かう。ラサの車はオフロード車が多く、中でもトヨタの「ランドクルーザー」がやたら目に付く。中国ではホンダ・日産の方が有名だがラサは別だ。因みに、新車で70万元（1000万円強）するそうだ。



カンパラ峠からヤムドク湖



カンパラ峠休憩所



ヤムドク湖とヤク



ヤムドク湖



ヤムドク湖

今回、市内観光で使っている「金杯（ジンベイ）」という中国でポピュラーな車は10万元（150万円）で買えるとのこと。約1時間行った所で「ラサ川」が「ヤルツォンボ川」に合流、今度は「ヤルツォンボ川」に沿って上流方面に進み、ヤルツォンボ川を渡った辺りから幹線をそれて峠に向かう。道は険しく、何百mもある断崖の中腹を進み、やがてつづら折りの道へと変わり、どんどん高度を上げていく。斜面には「ヤク」の群れが見える。道脇には雪も残っている。ヤルツォンボ川は遥か眼下に見える。

11時ちょうどに標高4749mのカンパラ峠に到着。突然「ヤムドク湖」の鮮やかな濃紺の湖水が姿を現した。峠のちよつと下った所の休憩所で暫く休憩&撮影タイム。現地の方の出してくれたミルクティーを御馳走になっていると、見たことのある若い日本人カップルが入ってきた。同じ旅行社のツアーに参加していてホテルも一緒。日本からカトマンズ経

由でヒマラヤ山脈を眼下に見てチベット入りしたとのこと。意外にも、ラサ・カトマンズ間は800

k mで北京・上海間よりずっと近く、陸路でも2日で着くそう
うだ。途中、エベレストから70 kmの地点を通るそう
だ。標高も5200 mが最高で問題無いとのこと。チャンスがあつた
ら行きたいが高山病が怖いので悩むところだ。彼ら2人は高
山病の気配は全く無くピンピンしている。測定器で測ってみ
ると、彼らは共に90代で全く問題無し、Y君は60で高山病状
態、私も最初60で深呼吸を繰り返す毎に3〜4ずつ上がり最終
的には90代になった。高山病は個人差が大きい、対策とし
ては、深呼吸・水分摂取・睡眠・ゆったり動作が重要で、風
呂・酒は避けた方が良くとのこと。

12時過ぎにヤムドウ湖の湖畔（標高4500 m）に到着。
ここで昼食（弁当）タイム。湖の水に触れると、冷たくて気
持ちはいい。食後、暫く寝そべってゆっくりする。気温は低い
が日差しは強烈だ。

約1時間ぶらぶらして13時に帰路に。カンパラ峠を再度越



ヤムドク湖



ヤムドク湖（帰り道）



ラサ川

え、元きた道を引き返す。途中、サイクリングで峠越えをし
ている欧米人ペアに遭遇。何ともすごい。ラサまであと40分
という所で、ラサ川の畔に車を停めて休憩タイム。ラサ川は
河原がとても広い。幾筋もの蒼い流れが河原をぬってゆつた
りと走っており、所々道の反対側まで延びてきている。ポプ
ラの木々が河原や水の中まで生えており、九寨溝とはいかな
いがポプラの黄・緑と川の色が調和して素晴らしい。水量が
増える8月頃には河原は水で隠れてしまうとのこと。対岸は
草木一本も無い裸の山々。ラサ付近の山という山は全てこん
な裸山だ。

15時半頃ホテルに戻る。時間が余ったが疲れたので外出せ
ず部屋で休息。夕食はチベット式火鍋だが二人とも食欲無し。
Y君は殆ど箸が進まなかったが、私は何とか全種類箸を付け
た（全ての料理に箸をつけるが私が中国でずっと続けている
流儀だ）。こちらで初めてビールを1杯だけ飲んだ。また、自
家製ヨーグルトもとても美味しかった。

夕食後、二人でホテルの脇のコーヒショップへ。ここ
のカフェラテを飲んで柔らかい椅子に深く腰掛けてゆつ
くりしていると高山病の症状も和らぐ。至福の時だ。今晚
は寝る前に10分位深呼吸を続けたためか比較的眠れた。
ただ眠りは浅く、またしても怖い夢を見続けていたよう
な感じがする。

「4日目」

今日はY君が帰る日なので一人でラサ市内観光。10時出発。先ず、ダライ・ラマの夏の離宮である「ノル布林カ（羅布林卡）」へ。ダライ・ラマ14世（インド亡命中）の純金製の椅子は世界一だそうだが、それ以外はあまり見る所が無く30分で終わってしまった。

昨日から「デプン寺（哲蚌寺）」へ行きたいとガイドと交渉していたが、許可証の中に入っていないので駄目と言っていた。今日改めて根掘り葉掘り聞いてみると、ポタラ宮以外は許可証不要、ただ旅行社として予定外の所は行けないとのこと。一昨日のガンデン寺の時は金を吹っかけておきながら近場で金が取れない時には行けないと言う。呆れたが怒る気にもなれず、自分で（タクシーで）行くことにした。昨日Y君も行きたいと言っていたのでホテルに戻って探したが外出中（今日は午前中は自由行動）。やむを得ず一人で出かける。



運転手・ガイド・私



デプン寺



デプン寺



タンカをかける斜面



セラ寺の問答修行

「デプン寺」は、ラサの北西8kmの岩山の斜面にあり、年に1回の「シヨトン祭」で寺院の西側斜面に掛ける巨大な布「タンカ」が有名だそう。寺院の規模はかなり大きく階段が多い。一通りまわるだけで1時間以上かかり疲れた。帰りはタクシーが拾えなかったもので、10円でトラックに乗せて貰って途中まで行き、タクシーに乗り換えホテルに戻った。

午後は、「セラ寺（色拉寺）」へ。約100年前に日本人の「河口恵海」が学んだことがある寺院で、「問答」が有名。僧侶達は年1回の問答の試験を通じて階級が上がる。この問答の練習は一般に毎朝行われるが、セラ寺は観光客向けに毎日午後3時から1時間半程度公開している。質問者と回答者がペアで独特のポーズで行う問答は興味深い。

夜は一人で食事後、コーヒー店でゆっくりする。やっと高山病も収まり夜はちゃんと眠れ（7時間）、悪夢も無かった。

「5日目」

高山病の症状は完全に消えた。今日は自由行動。10時から12時まで街を散歩。買物をしながら、ポタラ宮の前の広場まで歩き、真つ青の空にそびえるポタラ宮をしばらく眺めていた。

昼食後、ホテルを出発し空港へ。2005年から、トンネルを抜ける新しいルートができ空港が近くなった(2時間(100 km)から1時間強(60 km)に短縮)。ラサからカンプラ峠に向かう途中の所で幹線を外れ、ラサ川を渡りトンネルを抜け、今度はヤルトンボ川にかかる長い橋を渡る。河辺の感じはラサ川と同じだが川幅はかなり広い。空港はこのヤルトンボ川沿いにある。

〈スケジュール〉 宿泊は全て「香巴拉酒店」※印は個人行動

10/11(水) 北京→ラサ CA4112(9:30-14:40) 1H 遅れ。車でホテルへ(1H)。八角街散策

10/12(木) ジョカン寺・パイコル・ポタラ宮・ガンデン寺※観光

10/13(金) カンバラ峠(4749m)からヤムドク湖を眺める。ヤムドク湖畔で昼食(弁当)。

10/14(土) ノル布林カ・デブン寺※・セラ寺観光

10/15(日) AM自由行動、ラサ→北京 CA4111(15:40-20:30) 1:20 遅れで離陸、1:40 遅れで北京着。

空港に着いた途端、飛行機の到着が1時間以上遅れるとのアナウンス。空港ラウンジで旅行記を書いたりして時間を潰し17時少し前に離陸、経由地の成都で更に遅れ、北京には22時15分に到着。久し振りの長旅で疲れた。

今回の旅で感じたこと。①これまで「ラサ」・「チベット」と言うとき「高地」とか「山」を思い浮かべていたが、今回実際に行ってみて「水」の美しさに感動した。「ラサ川」、「ヤルトンボ川」、「ヤムドク湖」の水の美しさ、空・雲・太陽・風の具合に応じて水の色が濃紺・青・エメラルドグリーン・白と刻々と変化する様子は言葉に尽くせない。また、②高地だけあって、空の青さは格別だ。③チベットはやはり宗教の国。生活の中に宗教が完全に入り込んでその一部になっているのを実感した。

22・青海省

2006年10月20日〜22日

西安出張時の週末を利用して青海省を旅行した。

「1日目」

西安での仕事を終え空港へ。出発まで4時間あるので、足裏マッサージ店と喫茶店(ビールと軽食)で過ごした。飛行機は浦東からの経由便で30分以上の遅れで24時半に西寧着。

ホテルで寝たのは深夜2時になってしまった。
 「2日目」

朝8時過ぎ、青海湖日帰りツアーバスに乗って出発。参加者は30人弱で全て中国人。気温は予報によると最低3度・最高16度。朝はかなり寒い。昨夜の寝不足と高地（西寧の標高は2275m）のためか調子はあまり良くない。

10時に日月山に到着。急に青空が広がってきて辺りが鮮や

かに見える。日月山は標高3520m、さすがに空気が薄く感じ意識的にゆっくり行動。ここは唐の時代（7世紀）に、唐の文成公主が吐蕃（チベット）に嫁ぐ途上、唐から持ってきた鏡を捨てて唐に別れを告げたとされる有名な場所である。先週のチベット旅行時にラサで文成公主の話を色々聞いたこともあり興味深かった。

この後、倒淌河と呼ばれる河（中国の殆どの河は西から東



文成公主記念館



日月山入口



文成公主像



日月山



日月山



日月山から



青海湖



青海湖



青海湖



青海湖



田園風景（帰路途中）

に流れるが、全長45kmのこの河は逆に流れ青海湖に注いでいる）を渡り、11時30分に青海湖の湖畔に到着。青海湖は中国最大の塩水湖で、琵琶湖の6倍の広さで、湖面の標高は3260mとかなりの高地にある。昼食後、小型モーターボートに乗る。かなりのスピードで波も高くスリル

満点の爽快な20分間だった。湖面の青緑色と青空が調和している。

「青海」の名前がぴったりだ。

しばらく湖畔を散策した後14時半に出発。核兵器研製基地記念碑等を見学した後、北側ルートで17時半にホテルに帰着。夜は、繁華街を散策。中心部の西大街付近は高層ビルや高級デパートも多い。ケンタッキーで軽く夕食を取り早めに寝た。

「3日目」

朝はホテルの部屋でゆっくりし、午後の飛行機（西安経由）で北京へ戻った。

〈スケジュール〉 宿泊：青海賓館泊（2泊）

10/20（金）西安→西寧 MU2158（23:05-23:55）

10/21（土）青海湖日帰りツアー参加（日月山、倒淌河、青海湖、核兵器研製基地記念碑）

10/22（日）西寧→西安 MU2153（13:20-14:35）

西安→北京 CA1236（19:05-20:45）



青龍大瀑布



青龍大瀑布

9時「龍川
8時
が膨らむ。
飛び期待
足も吹っ
いい。寝不
気持ちい
が快晴で

朝7時半にホテル出発。まずは運転手の勧める「龍川大渓谷」と「青龍大瀑布」へ。最近開発された所でガイドブックにはない。「九曲溪」に沿って上流へ。途中、武夷山のシンボル「玉女峰」をバックに記念写真。ちよつと肌寒いが快晴で

「2日目」

に出張先での仕事を終え、上海から深夜便で2時間遅れの1時半に武夷山着。ホテルへ向かうタクシーの中で運転手が「1日150元でどうだ」と言う。今回は旅行ツアーを探して利用する予定だったが、時間効率と安さに引かれてタクシーに切り換えた。

「1日目」

だが天気にも恵まれ良い旅だった。中国大陸世界遺産巡りの最後は武夷山。一日のみの強行軍

23・武夷山 ㊸

2006年10月25日～26日



武夷山_九曲溪川下り



武夷山_九曲溪川下り



武夷山_天遊峰を望む



武夷山_天遊峰から

それぞれの烏龍茶の茶畑も見せて貰った。
12時半から「九曲溪」の川下り開始。筏は6人乗りで、竹の下地に竹製の椅子が付いており中々の作り。足場の所は水に数cm浸かるので

大溪谷」、9時半〜10時半「青龍大瀑布」と足早に見て回る。溪谷の中を流れる清流と大小幾つもの滝の眺めが素晴らしい。散策しながら感じたこと三つ。①施設が自然に調和している。中国では自然の中に奇抜な色彩の施設が多々見られる。日本人との感覚の違いと諦めていたが武夷山は違う。石段・手摺り・休憩所等々全てが自然にマッチしている。遊歩道に生えている木も切らずに自然のままにしている。②遊歩道沿

ずに対応してくれた。
次に、丁さんの案内で「仙凡岩茶厂」というお茶屋さんへ。武夷山は烏龍茶の産地。色々な種類の茶を試飲する。私も大分茶の知識がついてきたので話が弾んだ。今日は、日本に帰ってから飲み比べるために5種類の茶を50gずつ購入。400元以上する「金佛」から100元以下の「小紅袍」、皇帝に献上した「大紅袍」等、合計800円で購入。試飲後、それ



武夷山_玉女峰



仙凡岩茶厂



武夷山_九曲溪川下り



武夷山_九曲溪川下り

いに植物の名前や説明を書いた板がきちんと掛かっている。③地元の人がとても親切で丁寧に対応してくれる。今回の運転手の丁さんも人柄が良い。門票の購入・筏乗りの按配等々、きついスケジュールにも嫌な顔ひとつせ

靴を脱いで裸足になる。私以外は杭州から5人(男1・女4)の団体。とても楽しい人達でひっきりなしに歌ったり(英語の歌が多かった)、大声で叫んだり冗談を言ったりしている。妻の友達と何となく感じが似ていると思って聞いて見るとやはり学校に先生+OBだった。約10kmの溪流を第9曲から第1曲まで、天まで届く様な岸壁を眺めながら1時間半かけてゆつくり下る。渇水期で水量は少な目だそうだが、足にかかる水の感触が気持ちいい。

遅い昼食の後、15時から「天遊峰」へ。かなりきつい急な石段を400m登ると、遙か眼下にさつき川下りした「九曲溪」のくねくねした流れが見えてきた。武夷山一というだけあって本当に美しい眺めだ。2時間半かかるところを1時間強で往復。さすがに疲れた。

最後に「水簾洞」へ。17時を過ぎ辺りは少し暗くなってきた。西の山の端に太陽が沈んで行くのが見える。ガイドブックには、滝が高い崖の上から簾(すだれ)の様に流れ落ちる美しい写真が載っていたので期待して30分近く歩いて行ってみると、何と滝は渇水期で涸れていて滝壺の池にちよつと水があるだけだった。運転手の丁さんも水が少ないからお勧めでないと言っていたが本当だった。でも貴重な体験。暗くなり誰もいない道を引き返すと、丁さんが途中まで車で迎えに来てくれた。進入禁止の筈なのに、心配で無理やり入って



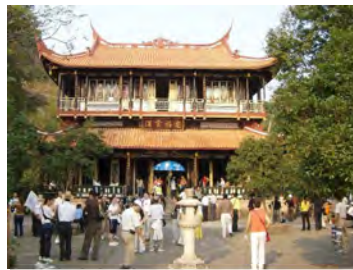
武夷山_天遊峰から



武夷山_天遊峰から



武夷山_天遊峰の頂上



武夷山_天遊閣

きてくれた様だ。感謝。
18時に観光終了。フライトまで時間があるので、按摩店で期間を潰し遅い夕食を食べて空港へ。かなり詰め込んだ充実した一日だった。丁さんには感謝の気持ちで50元プラスして200元を渡した。

<スケジュール>

10/25(水) 上海→武夷山 MF8552(22:40-23:40) 武夷山泊(蘇閩大酒店)

10/26(木) 武夷山(龍川大溪谷・青龍大瀑布・仙凡岩茶厂・九曲溪竹筏
遊覧・天遊峰・水簾洞) 武夷山→上海 MU5532(23:10-0:25)

24. 北京近郊 ①②⑤②②②⑥

北京は2003年から4年間駐在した思い出の地。北京市内は自転車・バス・タクシーで隅々まで見て回った。

天安門、故宮、天壇、頤和園、円明園は北京の定番の観光ポイント。

北京郊外の万里の長城（八達嶺）や明の十三陵は日本からの出張者を連れてよく訪れた。万里の長城のうち「八達嶺」は観光者が多くて銀座を歩いている感じ。一方、幕田峪と司馬台は隠れた穴場。特に司馬台は妻（+妻の職場の仲間）を連れて訪れたことがあるが、我々以外に誰にも会わなかったくらい辺鄙な所で崩れかけた所もあるなどとても思い出深い。

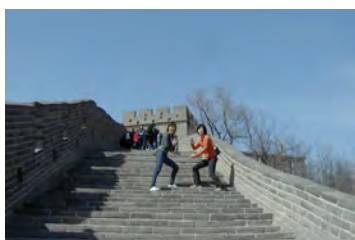
周口店は北京原人発見の地。北京郊外でタクシーをとばして行くと世界遺産ながらひっそりとしていた。

石家庄は合併会社がある都市でその会社の清算処理のため何度か訪れた。

清の西陵は石家庄出張の途上で立ち寄った。

北戴河は「北戴河会議」で有名な所。会社の旅行で訪れた。

天津は北京に近いが訪問は春節のころ一度だけ。



万里の長城_八達嶺



万里の長城_八達嶺



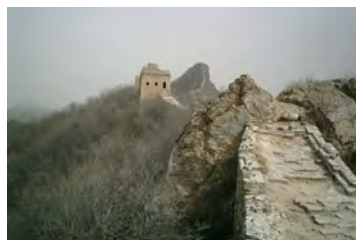
万里の長城_八達嶺



明の十三陵



万里の長城_幕田峪



万里の長城_司馬台



故宮



故宮



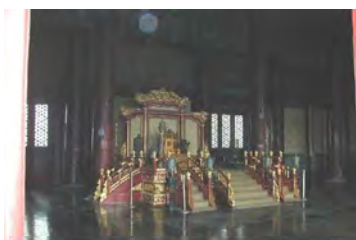
天安門



天壇



故宮



故宮



頤和園



頤和園



頤和園



円明園



釣魚台



頤和園



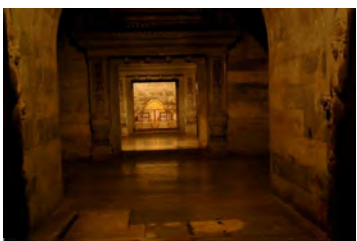
北海公園



鐘樓と古い街並み(胡同)



鼓樓



清西陵



清西陵



周口店(北京原人)



天津_周恩来専用機



天津市内



北戴河

【北京のお店紹介(1)】利群烤鸭店(北京ダック)

胡同の中の入り組んだ迷路のようなどころにある穴場中の穴場。前門から東へ歩いていくと看板があり、そこから看板の指示通り胡同を歩いていくとたどり着く。

とにかく安く美味しい(北京ダック1羽60元)。一見の価値有りだ。日本からお客さんや出張者が来ると必ず連れて行く。外国人(特に欧米人)の間でもクチコミで広まっていて、いつも半分以上は欧米人だ。

北京ダックというと、日本では皮だけを切って食べるイメージが強いが、北京では皮と一緒に肉もカットして食べる。

また、それ以外の部位も残らず利用するのが特徴だ。

2006年の国慶節に自転車で行ってみたが、周りの胡同はだいぶ取り壊されていたが、店は辛うじて残っていた。

(注) ネットで調べてみると、現在(2023年)も健在で営業中のようにだ。

当時(2004年)の価格は、二人で約150元。
料理の写真中の「○・△」は味の評価



胡同内を案内板を頼りに進む



胡同入口(正義路から)



店に到着



もうすぐだ



入るとすぐ正面に釜がある



店の入口



お兄ちゃんがダックを切って



北京ダック



店の様子



皿に盛ってくれる



果木挂炉烤鸭(60元)○



塩水鴨肝(7元)○



三絲蛋卷(14元)○



香辣肉絲(18元)○(香菜入)



利群鴨腸(20元)△



姜汁松花蛋(12元)○

【北京のお店紹介(2)】 無名居

釣魚台国賓館の副総料理長(吳家安氏を総料理長として招聘して開いた国宴菜(外国賓客に釣魚台で供する料理)の店。主体は揚州菜。これに中国各地の名菜を加えている。高級感のある店だが値段はお手頃(通常一人百元左右程度)。個室が多く少人数でも気軽に楽しめる。自宅から歩いて5分。

注) 赤字はお勧め品(価格は2004年当時)。
場所…北京市朝陽区麦子店棗營北裏32号



個室



無名居(分店)入口



清湯獅子頭 15元/人前
周建理(揚州(江蘇)淮陰出身)の好物
塩味ベージュ揚州の味



個室



水晶蝦球 78元



蛋黃鴨卷 28元
内側は油たっぷりの蛋黃がびっしり



大煮干絲 28元 (揚州菜)



蘿蔔絲餅 4元/1個
シンプルな魚餅ベースの餅付け
(揚州の蘿蔔點心)。美味しい。



氣鍋蒜泥魚魚湯 12元
山東の魚魚湯(湯を四川風にアレンジ)
釣魚台名菜。魚魚湯(イカの頭壳使用)



荷包(魚)魚 68元
餅の腹に口肉を詰めて煮た揚州家庭料理
甘醬の色に輝く。分店一番のお茶に入り



黃橋燒餅(揚州の蘿蔔點心の1つ)



南林香鴨 32元



上湯蒿菜 28元



魚米之鄉 45元
無錫派飯店の特設調理師:惠洪生氏の作
一粒一粒銀白でコシッとした魚米

北京市團結北口三号楼
(010-6582-2892)



【北京のお店紹介(3)】

北京大董烤鴨店(北京ダック)
現代風のヘルシーな北京ダック店。当日予約だと満杯となることが多い。北京ダックと言えは老舗の「全聚德」が有名だが、最近はこちらの方が人気のようにだ。



栗子燒白菜 40元



鹽水鴨肝 12元



北京挂炉烤鴨 49元/半分



奇妙鮮球 65元



沙茶百合鴨心 25元

25. 上海・蘇州近郊 ⑱

上海、蘇州、南京は、現地拠点（工場）があった関係で頻繁に訪れた。周辺の観光地にも週末を利用してたびたび訪れた。また、家族が中国に訪れた際にも観光している。



上海_外灘



上海_外灘



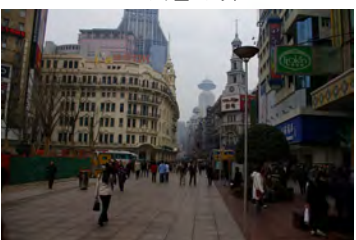
上海_外灘夜景



上海_外灘



上海_魯迅故居



上海_南京路



蘇州_留園



上海_豫園



上海_豫園



蘇州_虎丘



蘇州_拙政園



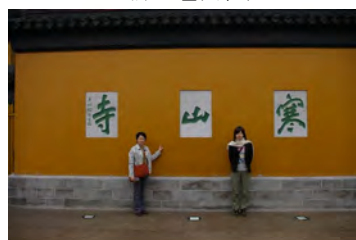
蘇州_留園



蘇州_同里



蘇州_寒山寺



蘇州_寒山寺



蘇州郊外



蘇州郊外



蘇州_同里



南通から長江を渡し上海へ



太湖



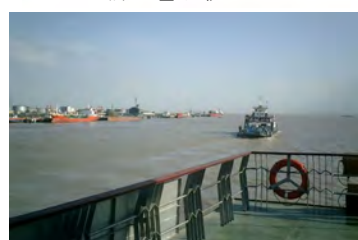
蘇州_京杭運河



南京_中華門



南京_明孝陵



南通から長江を渡し上海へ

西安の会社で仕事が終わると、現地会社の同僚と現地のお店へ。ここで安く美味しい料理を食べ、後は行きつけの酒場へ。南門の近くの「老亨利（ラオヘンリー）」という名の生演奏付きの酒場がお気に入りだ。価格は北京の三分の一。老板（マスター）ともすっかり親しくなった。

西安は有名な観光地が多い。休みを利用して兵馬俑・秦

トータルでは27回も行ったことになる。

西安は北京に次ぐ思い出の地。最初に訪れたのは2002年3月の家族旅行で、その後2005年6月に西安の会社の社長（兼務）となつてからは頻繁に訪れるようになり、結局、

26・西安・銀川 ③



南京_夫子廟



南京_總督府



杭州_西湖



西安_兵馬俑



西安_兵馬俑



西安_兵馬俑



西安_兵馬俑



西安_漢陽陵



西安_漢陽陵



西安_秦始皇帝陵



西安_大雁塔



西安_大雁塔



西安_華清池



西安_法門寺



西安_碑林



銀川空港



西安_城壁



西安_小籠包のお店

始皇帝陵・華清池・大雁塔・阿倍仲麻呂の碑のある興慶公園や、西安市の西部にある法門寺・乾陵（唐高宗の陵墓）にも行った。また、西安の城壁（中国で唯一、城壁一周14kmが完全な形で残っている）の上を2時間半かけて歩いたり、イスラム街で買い物したり、楽しい思い出が多い。銀川空港の写真は、敦煌旅行の経由地として立ち寄った時のもので、唯一訪れた寧夏回族自治区だ。

27・福建省・台湾

福建省はビッグユーザがいて合弁会社もあった関係で、福州・泉州・廈門など各都市を頻繁に訪れた。思い出深い地域のひとつである。廈門のコロンス島は有名な観光地。また廈門の海岸から台湾の金門島がよく見える。

台湾(台北)は2002年8月に家族で旅行した時の写真。



アモイ_南普陀寺



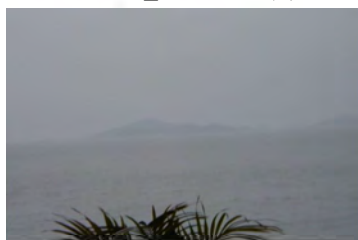
アモイ(廈門)の海岸



アモイ_コロンス島



アモイ_コロンス島



アモイ_金門島を望む



アモイ_金門島対岸



泉州市内



福州_鼓山



福州_鼓山



台北_故宮博物院



台北_中正記念堂



中正記念堂内の蒋介石銅像



猫空(台北郊外)



台北郊外



台北_士林夜市

28・香港・広東・海南島

香港は日本から福建省へ出張する際の中継地として空港の利用は何十回とあるが観光はほんの少し。その中でも福建省の顧客と一緒に観光したのが思い出深い。

広東省の広州と深圳は商談で訪れたが観光は殆ど無い。

海南島は「中国のハワイ」と言われる観光地。緯度もハワイと同じで、北京からはるか遠い南方にあり、なかなか行く機会がなかったが、幸運なことに、某プロジェクトの会議が海南島の三亚で開催され、その機会に観光することができた。マカオの写真は、2019年に訪れた時のもの。



香港



香港



香港夜景



香港



香港市内



広州市内



深圳



広州_陳氏書院



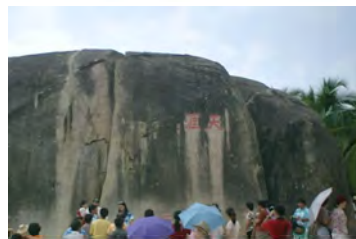
海南島



海南島



マカオ_聖ポール天主堂跡



海南島

「番外編」 駐在以降の中国旅旅行

中国駐在から帰任以降は、国内関係の業務が主体となったため、中国を訪れる機会が大幅に減った。それでも中国旅歩きの味は忘れられず、退職後は、会社の元同僚（OB）を誘って年に1回程度、中国奥地への旅に出かけている。



華山_北峰ロープウェイ



華山_北峰ロープウェイ



華山_北峰頂上(1614.7m)



華山_北峰ロープウェイ



華山_天梯



華山_擦耳崖



華山全景



華山_日月崖



華山_擦耳崖



金庸の「華山論剣」の碑

崖絶壁の山だ。
（奇険は中国語で険峻の意味）
今回は時間の関係で、北峰周辺のみで、核心部の長空栈道などはスキップ。
いつか機会を見つて挑戦したい。

A. 華山
2009年9月24日

中国駐在中の仕事の残務の関係で西安を訪れた際に、仕事の合間を利用して現地の仲間と一緒に「華山」に登った。
華山は日本人にとっては馴染みのない山だが、日本に富士あり、中国に華山ありと言われるくらい中国では有名で「中国五大名山」の一つに数えられており、奇険天下第一山、断

B. 九寨溝・黄龍（2回目）

会社の元同僚二人一緒にと九寨溝・黄龍を旅した。
2016年9月5日（月）～9月6日（火）

九寨溝・黄龍は、私にとっては13年振りの訪問だ。

九寨溝・黄龍とも前回に比べ観光地化が進み、遊歩道もすっかり整備されていた。黄龍には、ロープウェイも設置され、最上部まで楽に行けるようになっていた。

一方で、九寨溝の方は昔より水量が減少し完全に水が涸れている所もあった。

<スケジュール>

9/4(日)

8:30 羽田空港発(CA184) 11:30 北京空港着

13:00 地下鉄で東直門へ 昼食

22:15 北京空港離陸(CA4122) [5.5H 遅れ]

25:40 九寨黄龍空港着 [4.5H 遅れ]

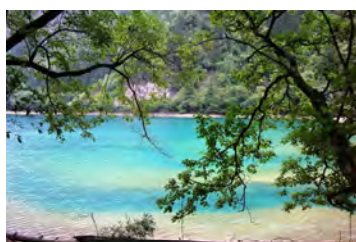
タクシーでホテルへ (51km/100 分)

9/5(月) 九寨溝観光

9/6(火) タクシーで黄龍へ 10:30 黄龍観光

16:00 タクシーで松潘へ 松潘古城観光

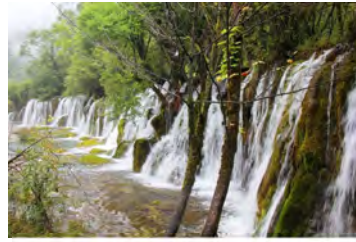
9/7(水) 次の観光地(楽山)へ



熊猫海



箭竹海瀑布



箭竹海瀑布(幅 150m, 高 5m)



珍珠灘瀑布(幅 163m, 高 40m)



珍珠灘



五花海



長海(海拔 3060m)



珍珠灘瀑布



珍珠灘瀑布



雪山梁峙(海拔 3960m)
[九寨沟→黄龙移動中]



豆豆客栈(宿泊ホテル)



人気の五彩池(海拔 2995m)



黄龙_五彩池



黄龙の最奥部にある五彩池



黄龙全景(望龍坪展望台から)



争艶彩池(海拔 3460m)



黄龙_五彩池



黄龙_五彩池



洗身洞(海拔 3280m)



金沙鋪池(海拔 3305m)



明鏡倒影池(海拔 3400m)



松藩古城市内の露天商



松州西門は山の上



松藩古城_松州北門

C. 楽山・峨眉山・青城山・都江堰（2回目）

2016年9月7日～10日

九寨溝・黄龍観光の次は、楽山・峨眉山・青城山・都江堰を一気に回った。

<スケジュール>

9/7(水) 11:50 九寨黄龍空港発(CA4488) 12:45 成都双流空港着
13:50 長距離バス+タクシーで楽山大仏へ
17:10 楽山大仏 18:30 タクシーで峨眉山のホテルへ
9/8(木) 終日 峨眉山 高速鉄道で成都へ
9/9(金) AM 青城山 PM 都江堰(灌漑施設)
夕方 寛窄巷子を散策&夕食
9/10(土) 8:00 成都観光(錦里/武侯祠, 金砂遺址)
15:05 成都双流空港発(CA459) 20:45 成田空港着



楽山大仏



楽山大仏



楽山大仏



大渡河

岷江

楽山大仏からの眺め



峨眉山_十方普賢



峨眉山_霧の中の十方普賢



峨眉山_金頂(千仏頂)3077m



和諧号利用(峨眉山→成都)



峨眉山_無梁磚殿(聖寿万年寺)



峨眉山_万年寺



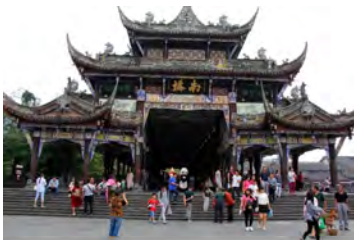
月城湖を舟で渡って駅へ



青城山入口



和諧号: 新幹線そっくり



都江堰_南橋



青城山_上清宮



青城山ロープウェイ



都江堰_宝瓶口



都江堰_伏龍觀からの眺め



都江堰全景



成都_武侯祠



都江堰_魚嘴:岷江が外江(左側)と内江(右側)に分かれる所。現在は渇水期で、外江側は水が流れていなく干上がっていた。



都江堰_安瀾索橋



金面具(金沙遺址博物館)



成都_三義廟



武侯祠に隣接する「錦里」

D. カシユガル

2017年6月26日～7月5日

会社の元同僚2人と中国の西の果て…カシユガルに行ってきた。本当に遠い。何せインドのニューデリーよりも西に位置するのだから。飛行機を乗り継いで20時間もかかる（正味の飛行時間は11時間）。それでも四川航空エコノミー（格安航空ではなく食事・テレビ付）で往復2万5千円というのはびっくりだ。乗り継ぎはあまり良くないが。

カシユガルは中国だが全く別の国の感じ。今回は市内のホテルに長期滞在して、ゆつくりと市内や周辺の地域を見て回ったが、その中で感じたことや気付いたことを以下に記す。

【警備・治安】

カシユガル地区全てにおいて、警察の厳格な監視下に置かれている。警官の数が多く、10人に1人は警官という感じ。街の通りは20m毎に警察が詰めている。ホテルの入口には警察による手荷物X線検査が常に行われている（地下街、デパート、スーパー、バザール等も同様）。

公園や観光施設の一部も閉鎖中。国道、高速道路の至る所に検問施設がある。

カシユガルから200km先のヤルカンドという町へ行く間に、3～4回の検問あり。車から降りて身分証・パスポートの写真と本人とを自動で照合する機械を通過させられる。日本人

に対しては比較的チェックは甘いが、ヤルカンドからの帰りに詳細な質問やチェックを受けた。

ヤルカンドはウイグル族が95%の町で、以前に暴動や紛争があつたため最も厳しい管理となっている。他国からのローミングでのデータ通信まで遮断されていた時期もあつたようだ。

下っ端の警官はウイグル族。ウイグル族がウイグル族を管理する体制を作っている。

このような状況だが、特に緊迫感はなく慣れてしまっている感じ。

【交通事情】

タクシー運転手の中には、中国語が話せない、地図が読めない人が多数。行き先を漢字で書いても地図で示してもNG。発音してくれと言われるが、ウイグル族に通じるように発音するのは結構難しい。結局、スマホのナビを見て、その角を右へ左へと自ら指示するのが確実だった。

タクシーの基本料金は5元。市内は5～10元でどこでも行ける。一時間乗っても50元（800円）止り。領収書発行の仕組みがなく、メーターを倒さないケースが多々ある。

乗用車は日本車が結構多く5割近い感じ。バイクは100%電動車。ナンバープレート有り（大型）と無しがある。

主要な通りは中央が車、一番端が歩道、その間が電動バイ

クのゾーン。歩道の一部は車バイクの駐車場になっている。電動バイクは音もなくスピードを出すので要注意だ。

【ウィグル人について】

カシュガルはウィグル族が8割近く。年配の人は中国語が話せない。漢族はここでは少数民族。漢族居住区に固まって暮らす。漢族居住区には関門があり固くガードされている。子どもが多い。道端の至る所に見かける。子どもも大人も人なつっこい。カメラを構えると寄ってくる。

まじめで勤勉そう。綺麗好きでよく周りの掃除をする。道にゴミが無い。周辺の道路への水撒きも日課。

日本人だと分かると親しみを持ってくれる。漢族は嫌い。

【食事について】

羊肉とナンが主食。野菜は少なめ。果物はかなり豊富。滞在中の食事（ホテル朝食以外、夕食7回、昼食6回）のうち、イスラム系…9回、漢族（四川）系…3回、西洋風イスラム…1回、全て違う店利用した。特にメニューの無いような庶民の店を意識的に利用。ビールは置いていない所が殆どだが、持込みで飲むのは許可してくれた。シシカバブー（烤羊肉串）は絶品。羊肉や脂身が嫌いな人は辛いかも。

【街並み】

旧市街、新市街、漢族街で街の雰囲気全然違う。

＜スケジュール＞

- ①6/26(月)成田 20:20→[3U]→0:40 成都
- ②6/27(火)成都 8:10→[3U]→ウルムチ
→14:40 カシュガル
- ③6/28(水)パミール高原日帰りツアー
- ④6/29(木)カシュガル(旧市街, 時計台, 国際バザール, エイティガール寺院)
- ⑤6/30(金)ダワクン砂漠日帰りツアー
- ⑥7/1(土)ヤルカンド訪問(長距離バス利用)
- ⑦7/2(日)カシュガル(アパク・ホージャ墓他)
- ⑧7/3(月)カシュガル(旧市街他)
- ⑨7/4(火)カシュガル 15:25→[3U]→17:10 ウルムチ
22:40→[3U]→1:50 成都
- ⑩7/5(水)成都 12:35→[3U]→17:55 成田
3U:四川航空



天山山脈を超えカシュガルへ



天山山脈



カシュガル市内の眺め



エイティガール寺院



カシュガル旧市街



カシュガル旧市街



アパク・ホージャ墓(香妃墓)



エイティガール寺院



エイティガール寺院



白沙湖(パミールへの途上)



アパク・ホージャ墓(香妃墓)



アパク・ホージャ墓(香妃墓)



馬車でタワクン砂漠の入口へ



7000m 級の山々の山頂は雲の中
(7-8 合目まで見える)



カラクリ湖(海拔 3600m)



ヤルカンド_一般庶民の墓



ヤルカンド
アマンニサ・ハンの墓



タワクン砂漠



カシュガル旧市街



ヤルカンド_街で出会った少年



ヤルカンドの街中



カシュガル旧市街の子ども達



カシュガル旧市街の子ども達



カシュガル旧市街の子ども達



カシュガル市内の屋台



カシュガル市内の屋台



カシュガル旧市街の子ども達



カシュガル市内のお店



カシュガル市内の料理店



カシュガル市内の屋台



庶民のレストラン
サムサを食べている



サムサを焼いている様子。小麦粉の生地の中に羊肉、羊の脂身、たまねぎ、胡桃、胡椒、塩を混ぜ作った餡を包み これを釜の内側に貼り付け黄金色に焼き上げ完成。



ナンを釜の内側に貼り付け焼いている



カシュガル：大バザール



カシュガル：大バザール



カシュガル市内の野菜市場



夕暮れのウルムチ空港(帰路)



宿泊した天縁商務酒店



カシュガル：三輪車

<スケジュール>

11/7(水) 14:55 成田(CA930)-17:20 上海(浦東)20:00(MU5375)-
22:45 張家界→ホテル
11/8(木) 8:00 ホテル発(荷物預け) 9:00 張家界(バス)-12:15
鳳凰 昼食/鳳凰古城観光
11/9(金) AM:鳳凰古城観光 13:30 鳳凰(バス)-16:45 張家界(荷
物引取)バスで武陵源へ
11/10(土)武陵源 Gate→百龍電梯→袁家界/天下第一橋→楊家界
→賀龍公園→十里画廊→(トロッコ)→武陵源 Gate
11/11(日)AM:ガラス橋観光 PM:黄龍洞観光
11/12(月)9:00 武陵源発 天門山観光 21:30 張家界(FM9344)-
23:20 上海(浦東)→ホテル
11/13(火)西塘観光→新天地→田子坊→豫園→外灘→ホテル
11/14(水)AM:南翔古城地 17:20 上海(浦東)(CA157)→21:00 成田

E. 鳳凰・張家界・上海
2018年11月7日～14日
会社の元同僚3人と中国湖南省の鳳凰・張家界と上海を旅した。鳳凰・張家界は私にとっては二度目の訪問だ。



鳳凰古城_沱江川下り



鳳凰古城_沱江川下り



鳳凰古城_雪橋



鳳凰古城_沱江夜景



鳳凰古城_沱江風景



鳳凰古城_沱江川下り



鳳凰古城_沱江夜景



姜糖(生姜飴)作り(伸ばして棒状に)



鳳凰古城_街中にて



張家界_迷魂台(袁家界景区)



張家界_百龍田梯(エレベータ)



張家界_黃石寨ロープウェイ



張家界_石峰林



張家界_乾坤柱(アバターのロケ地)



張家界_迷魂台(袁家界景区)



張家界_十里画廊



張家界_御筆峰



張家界_石峰林



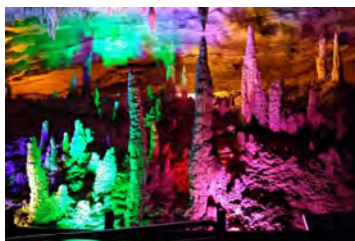
玻璃橋の上にて



玻璃橋(ガラス橋)



張家界_十里画廊



黃龍洞



黃龍洞



天門山



エスカレータを7回乗り継ぐ



天門山への999段の上天梯



天門山_玻璃棧道(ガラス棧道)



天門山の棧道



上天梯の上から



水の都_西塘(浙江省)



天門山_後方は「雲夢仙頂」



天門山_ガラス棧道



西塘_煙雨長廊
(Mission Impossible の舞台)



西塘風景



上海_外灘夜景



上海_外灘夜景



西塘風景



南翔名物の小籠包



南翔名物の小籠包



上海郊外_南翔老街

F. 長春・西寧・チベット（2回目）

2019年9月10日～18日

元会社の仲間と8泊9日で西寧から青蔵鉄道でチベットへ入り、ラサ・ギャンツェ・シガツェをまわる旅を計画した。私自身は、北京駐在中に空路でラサを旅している（21章参照）。チベットの空の青さと近き、信仰に対する直向きさが今でも強く心に残っている。今回の旅行では、初めて乗る青蔵鉄道と、ラサより更なる奥地への期待感でいっぱいだ。

「1日目」

旅は初日からトラブル。前日の台風の影響で成田空港内が大渋滞した関係で出発が遅れ、乗り継ぎ便に間に合わず。このため、中継地の長春で足止めとなり、航空会社の手配したホテルに宿泊することとなった。

トラブルや予定変更は旅の醍醐味と気を取り直して、翌日前半は長春観光に当てることにした。取り急ぎ、西寧へのフライトの再予約や西寧観光の日程変更（1日短縮）を現地のガイドと交渉・調整をした後、東北菜での夕食がてら、翌日の計画を話し合った。（東北菜は中国東北部の料理）

「2日目」

旧満州国の首都・長春の半日観光、もちろんガイドブックなど何も無かったが、ネットで調べながら、とりあえず、偽



偽満宮博物館 同徳殿



偽満宮博物館



長春の夕暮れ



旧満州国軍事部跡



偽満宮博物館 同徳殿内部



偽満宮博物館 同徳殿内部



勝利公園



関東郡司令部旧址
(現.中国共産党吉林省委員会)



旧満州国国務院跡
(現.吉林大学医学部)

満皇宮博物院・旧満州軍司部跡などを見てまわった(旧満州国関連の施設は中国政府の立場上、「偽・」がついている)。

清朝末期から日中戦争までを描いた浅田次郎の一連の歴史小説(蒼穹の昴・珍妃の井戸・中原の虹・天使蒙塵)の中で、完結編の「天使蒙塵」の舞台となったところであり、歴史ファンとしては一度訪れたいと思っていたので、今回のトラブルはある意味ラッキーで少し得した気分だ。

夕方、1日遅れの同じ便で、無事西寧に到着。

「3日目」

今日は西寧観光。2日間の観光の予定だったが長春足止めの影響で1日に短縮。天気があまり良くなかったので青海湖行きは断念して西寧近郊、タール寺(塔爾寺)、青海蔵文化博物院、東関清真寺(モスク)を見てまわる。ガイドは、西寧近郊出身でチベット族の多杰(ドルジェ)さん。

タール寺は、チベット仏教ゲルク派の六大寺院※のひとつで、ゲルク派開祖ツォンカパの生誕地。1360年にツォンカパの生母が立てた仏塔がもとになりタール寺の名がついた。ツォンカパはチベット仏教の主流となっている宗派であるゲルク派の開祖。彼の死後、ゲルク派は二系統に分離し、主流はダライ・ラマ、傍系はパンチェン・ラマが継承した。

※ゲルク派六大寺院

【西寧】タール寺◎、【ラサ】ガンデン寺○、セラ寺◎、



タール寺(塔爾寺)



タール寺(塔爾寺)



タール寺本堂に向かって
五体投地を繰り返す人々



タール寺 如来八塔



東関清真寺
お祈りの前に足を洗う場所



東関清真寺(モスク):中国
西北の4大イスラム寺院
の1つで最大の規模を誇る

デブン寺○、【シガツェ】タシルンポ寺◎、
【甘肅省】ラプラン寺△

◎今回訪問、○前回訪問、△未

我々がこれから訪れるチベットの各寺院の源流となる寺院を最初に訪れたのは大変意義深かった。

また、青海蔵文化博物院に展示している618mの巨大なタンカ(布に描かれた宗教画)は壮観で、ギネスにも登録さ

れているが、残念ながら写真撮影は不可だった。

夜、今回の旅のハイライトの一つの青蔵鉄道に乗る。コンパー

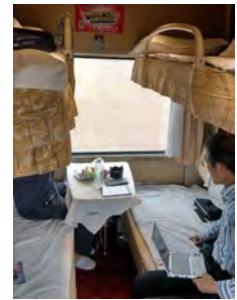
トメントに4人が入る軟臥（二等寝台二段ベッド）で西寧からラサまで22時間の列車の旅。多くの区間で標高4000m以上の高地を走り、途中に鉄道世界最高地点のタンラ峠（標高5072m）もあり高山病が心配されたが、呼吸が少し苦いのと軽い頭痛程度で済んだ。

「4日目」

夕方5時、無事ラサに到着。ホテルはチベット族エリアにある「崗堅飯店」。パンチェン・ラマ11世が訪問したことがあるとのこと。

チベット自治区内への外国人の立入りは、特別な許可証を事前に取得した上で、旅行社のツアーでの観光が必須（個人旅行は禁止）。今回は4人（+ガイド+運転手）のツアーという形で行動した。

ガイドの劉さんは、チベットでのガイド歴12年



客室の様子



ナクチュ駅(4482m)で停車中



鉄道世界最高地点(5072m)付近



鉄道世界最高地点はもうすぐ



ホテルのあるチベット族エリア



ラサのホテル:崗堅飯店



ラサ駅に到着



バルコルを祈りながら時計回り



ヤクのバター販売中
(蝋燭に使われる)



バルコル方面へ



ジョカン寺前でも五体投地



ジョカン寺前広場へ



五体投地をしている女性



ボトルの水を広場に撒くと



ポタラ宮(ライトアップ直後)



ポタラ宮(ライトアップ直前)



人力車でホテルへ戻る



チャクポ・リの観景台から



涅槃像スタイル

のベテラン。漢族で甘肅省の敦煌出身。3月から冬頃まで単身赴任とのこと。日本語は今一つの感があり、時折中国語を交えての会話となるが、とにかく真面目で手抜きは全くなし。しばしば、観光先の僧侶やお店の人と粘り強く交渉し、観光が充実するよう頑張ってくれた。

運転手の占堆（ザンドイ）さんは、チベ

ット族でラサ出身。運

転はやや荒いが上手。

チベット族らしく信

心深い。また、彼の中

国語は判りやすい。開

発が進んでラサの特

色が失われつつある

ことを悲しんでいた。確かにホテルの周辺は13年前に訪れた時に比べ、整然としていて小綺麗になった一方で、チベットらしさ・特色が失われてきたように思う。

夜にポタラ宮広場を散策。ポタラ宮のライトアップ絶景を楽しんだ。ガイドさんによるトリック写真も楽しんだ。

「5日目」

今日はラサ市内観光。ジョガン寺、ポタラ宮、セラ寺を見学。標高3600m〜3700mの所で階段も多いため息苦しく、ゆっくり時間をかけて見て回った。ラサは宗教の街で至る所に巡礼者の姿、五体投地をしている人も多く見られる。

◇ジョカン寺豆知識

7世紀の吐蕃時代にソンツェン・ガンポ王の菩提寺として創建された寺院で、2000年に世界文化遺産に追加登録された。寺の創建に関しては、唐から嫁いだ文成公主、ネパールから嫁いだティツン王女に関わる伝説がある。現在、寺には、ティツン王女が持参した十一面観音像と、文成公主が持参した釈迦牟尼像が祀られている。

◇ポタラ宮豆知識

ラサにあるマルポリの丘（チベット語で紅山）に、1642年から十数年かけて建設された宮殿。富士山並の標高3700mに位置し、東西360m、南北300m、13階建てで、部屋数も1000を超え、単体建築物としては世界最大級。



ジョカン寺の内部 2F



ジョカン寺の内部 1F



朝のジョカン寺



階段途上で振り返る



階段(387段)をゆっくり



ポタラ宮へ



セラ寺 本殿ツォクチュン



午後、セラ寺へ



デヤン・シャルから見た白宮



中庭で行われている問答修行



中庭で行われている問答修行



ハムドン・カンツァン

河口慧海や多田等観が学んだ

ポタラ宮は 20 人。も有数の僧侶を抱える寺（ジョカン寺は 124 人、

かつては仏教大学で、最盛期には 5500 人もの僧侶がいたが今は約 400 人。それでも、チベットで

◇セラ寺豆知識

ラサ中心部から北に 8 km のセラ・ウツェ山の麓にある寺で、1419 年、チベット仏教ゲルク派創始者のツォンカパとその門弟ツォチェン・チュジェによって建立された。

ポタラ宮の壁は、白・紅・黄の 3 色でできている。建物自体は大理石だが、壁はその上の 3 色の塗装をしている。白はミルクの混合物、紅は赤い柳から作る顔料、黄色は天然の鉱物から作る顔料とのこと。また、通路も全て大理石でできている。

宮殿は、歴代ダライ・ラマの居住と政治機能を司る「白宮」と、宗教的な領域である「紅宮」に分かれている。宮殿内には数々の仏像や壁画などがあり芸術品の宝庫。

境内には本堂、大集会場、異邦堂、下方堂、真言堂の他、僧侶たちの居住する僧房が建ち並ぶ。明治から大正時代にかけて、日本の仏教学者…河口慧海と多田等観が滞在し修行をしたことでも知られている。

◇セラ寺の問答修業について

日曜を除く毎日15時～17時半、50～60人の僧侶が参加。二人一組で、質問役と回答役に分かれ、回答役が質問に上手く答えられないと、質問役が大きな身振りで両手をたたき回答者を問い詰める。これが延々と続く。時間が来ると、質問者と回答者が交代したり、組合せが変わったりする。初級、中級、上級と列が分かれているが、初級から上級に上るには20年以上かかるとのこと。

「6日目」

今日はラサからより奥地のギャンツェへ。途中、カンパラ峠、カローラ氷河を越えて行く。カンパラ峠(4998m)からは、トルコ石のような神秘的な色合いのヤムドク湖を望む。青空でなくともこんなに美しい色が出るのは不思議。カローラ氷河も圧巻で間近に見ることが出来る。ただ温暖化の影響で先端が少しずつ後退しているとのこと。カローラ氷河の展望所は標高が5039mあり、二本足で地面に立った状態での最高高度を久々に更新。因みに今夜のホテルも宿泊最高高度記録(4040m)。高度順応がだいぶ進んできた感じ。



ヤムドク湖(カンパラ峠から)



ヤムドク湖(カンパラ峠から)



カンパラ峠への途上、ヤルンツァンボ河を望む展望台から



カローラ氷河(展望所から)



カローラ氷河(海拔 5039m)



トルコ石のような神秘的な色のヤムドク湖(曇りでも鮮やか)



ギャンツェ飯店(4040m)



斬米拉神山(4354m)から望むダム湖



カローラ氷河の先端(拡大)

「7日目」

今日が観光の実質最終日
(明日・明後日は移動中心)。

ギャンツェから更に奥のシ
ガツェへ。この辺りはチベッ
トの穀倉地帯で麦畑(大麦)が
広がっており4000mの高
地とは思えない農村風景が広
がる。白居寺、シャル寺、タシ
ルンボ寺をゆつくり見て回
る。

◇タシルンボ寺豆知識

1447年、ゲルク派の開
祖ツォンカパの高弟ダライ・
ラマ1世によって創建され、
ゲルク派六大寺院のひとつ。
ダライ・ラマ5世時代に同寺
の僧院長が阿弥陀菩薩の化身
として、パンチェン・ラマの地
位を得てからは、歴代のパン
チェン・ラマによる政治・宗教
の中心として繁栄。最盛期に



白居寺 パルコル・チョルテン



白居寺 入口付近



ホテル近くの白居寺へ



シャル寺(シガツェの途上)



農村風景:堀にヤクの糞を
貼り付けて乾かしている。



農村風景:大麦畑(ギャンツェ→
シガツェへ途上,4000mの高地)



チベット料理(中華に似ている?)



シガツェで昼食(チベット料理)



シャル寺:チベット中国折衷様式



タシルンボ寺は敷地が広い



タシルンボ寺全景



昼食後、タシルンボ寺へ



タシルンボ寺の大弥勒殿
「タシ・ナムギャル・ラカン」



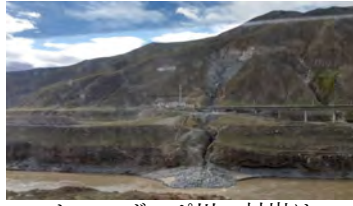
タシルンボ寺の仏塔



そばえ立つタンカをかける壁



ヤルンザンポ川



ヤルンザンポ川。対岸はラサとシガツェを結ぶ鉄道線路



タシルンボ寺から市内を望む



ヤルンザンポ川(飛行機から)



ツアー最後の記念写真



ヤルンザンポ川展望所

は4500人、現在でも1000人の僧侶が生活している。タシルンボ寺の大弥勒殿「タシ・ナムギャル・ラカン」には、像高26mの弥勒座像(金銅仏)としては世界最大)が安置されている。

タシルンボ寺の見学中、座主のパンチェン・ラマ11世(北京在住)がこれから寺に来るという話が伝わり、観光者が一目見ようと色めき立って待ち構えた。ガイドの劉さんも興奮状態。私達も1時間待ったが時間の関係で諦

めて戻ることとした。

パンチェン・ラマ11世は、ダライ・ラマ14世が認定したゲンドウン・チューキ・ニマと、中国政府が認可したギェンツェン・ノルブの二人が並立。但し、前者は中国政府に保護(隔離)され行方不明。現在は、中国政府が認可した方が実質上のパンチェン・ラマ11世となっている。本件を西寧でガイド・ドルジェさん(チベット族)にそれとなく聞いてみたところ、「最初は違和感があったが、徐々に尊敬の強く抱くようになった」とのこと。複雑な心境だ。一方、ガイドの劉さん(漢族・宗教は未確認)が興奮したのは信仰心と言うよりは、めつたに無い機会なので一緒に写っている写真をSNSにアップしたいということらしい。

「8日目」

チベットも今日が最後。シガツェからヤルンザンポ川沿いのG318国道を東進しラサ空港へ。G318国道は、上海とシガツェを結ぶ全長5476kmの中国最長の国道で、その先は115kmでネパールのカトマンズまで続いている。

ヤルンザンポ川は、西チベットのカイラス山付近に源を發し、チベットを南東に流れた後、ヒマラヤ山脈の縁を回り込み南西に流れを変えブラマプトラ川となり、最終的にガンジス川に流れ込むチベット最大の川だ。

ラサからは空路で成都へ。ラサ空港から離陸直後、機内か

らヤルンザンポ川の流れがよく見えた。

成都での夕食は最近話題の寛窄巷子へ。寛窄巷子は清代に築かれた古い町並みを若者が集うモダンなエリアに変身させたところで、すごい活気だ。成都のホットスポットとなっているとのこと。

「9日目」

成都で一泊後、朝はゆっくりして、お昼の便で帰国の途についた。

今回は飛行機の乗り継ぎトラブルなどハプニングもあったが、西寧・青蔵鉄道・ラサから、更に奥地のギャンツェ・シガツェまで行くことができ、また、5000mを超える高地体験など、チベットを十分に堪能できた。

また、思いがけなく旧満州国の首都だった長春も観光することができた。

手作りの旅の醍醐味を十分満喫できた貴重な体験だった。

チベット旅行行程 (2019/9/10-18)

日付	行程	宿泊
9/10 (火)	14:35成田→16:10長春 (CZ624) [70分遅れ 乗継便に間に合わず長春泊]	長春) 乾元富民酒店
9/11 (水)	長春観光 偽満皇宮博物院・旧満州国国務院跡・旧満州国軍事部跡・関東軍司令部旧址・勝利公園 長春16:40→20:10西寧 (CZ6453)	西寧) 神旺大酒店
9/12 (木)	10:50-12:30タール寺 13:50-15:00青海蔵文化博物院 15:30-16:15東関清真寺(モスク)&回族街 19:31 青蔵鉄道(Z265次列車) でラサへ	車中泊
9/13 (金)	16:45 ラサ着 18:55-21:10バルコル&ポタラ宮広場散策	ラサ) 崗堅飯店
9/14 (土)	ラサ観光 8:45-9:45ジョカン寺 10:10-12:45ポタラ宮 14:00-16:00セラ寺	ラサ) 崗堅飯店
9/15 (日)	12:25雅江河谷 13:15カンバラ峠 13:35ヤムドク湖 16:15カローラ氷河	ギャンツェ) ギャンツェ飯店
9/16 (月)	8:30-9:20白居寺 10:45-11:15シャル寺 シガツェへ移動 13:10-15:20タシルンボ寺	シガツェ) 神湖酒店
9/17 (火)	7:25ラサ空港へ移動 11:50 空港着 ラサ15:20→17:30成都 (3U8696) 19:30-21:10寛窄巷子散策&夕食	成都) 成都礼頓酒店 春熙店
9/18 (水)	成都12:25→17:55成田 (3U8085)	—



成都の寛窄巷子を散策



寛窄巷子の説明板



寛窄巷子の様子

あとがき

2020年からは、新型コロナウイルス感染症の影響で海外に出るのが難しい状況となり、旅歩き大好き人間としては何ともモヤモヤした日が続いた。

ただ、じっとしていても仕方がないので、この間は、近場に目を向けた活動しようと思い、「東京23区内の旧河川・旧水路の痕跡をくまなく辿る」という目標を立て、現在も歩き続けている（23区中、残りあと3区になった）。さらに、その地域の主な旧道や坂道、スリバチ地形なども探しながら、「プチ・ブラタモリ」的な探検も楽しんでいる。

2023年も5月に入ると、世界的にもコロナ前の状況に戻り、海外旅行も解禁となってきたので、今年後半からはまた中国の旅歩きを再開したいと、中国地図を眺めながらワクワクしている。ただ、年齢も考え、あまり無謀な・ハードな計画は慎もうと思っている。また、退職後に参加した地元NPO（まちづくり関連）でのボランティア活動ともうまくバランスをとりながら進めて行きたい。

この旅行記は、私が旅行中に感じたことの記録と写真を再編集したもののだが、これから中国を旅してみようと思っている方々の参考になれば幸いである。

最後に、今回の中国各地への旅行に同行いただいた方々、計画作りや準備にご協力をいただいた方々、並びに、本旅行記の執筆・出版に当たって有益なアドバイス・ご協力いただいた関係各位に心より感謝いたします。

2023年7月

中国旅行記 ～中国辺境と世界遺産をめぐる旅～

発行者 坪井洋治

E-Mail tsuboiyoji@gmail.com

URL <http://y-tsuboi.d.doood.jp/>

発行日 2023 年 7 月 1 日